

42549

教科書文庫

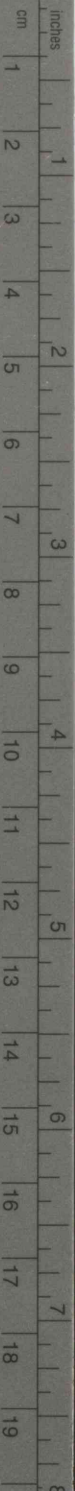
4
810
44-1933
200030
2106

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

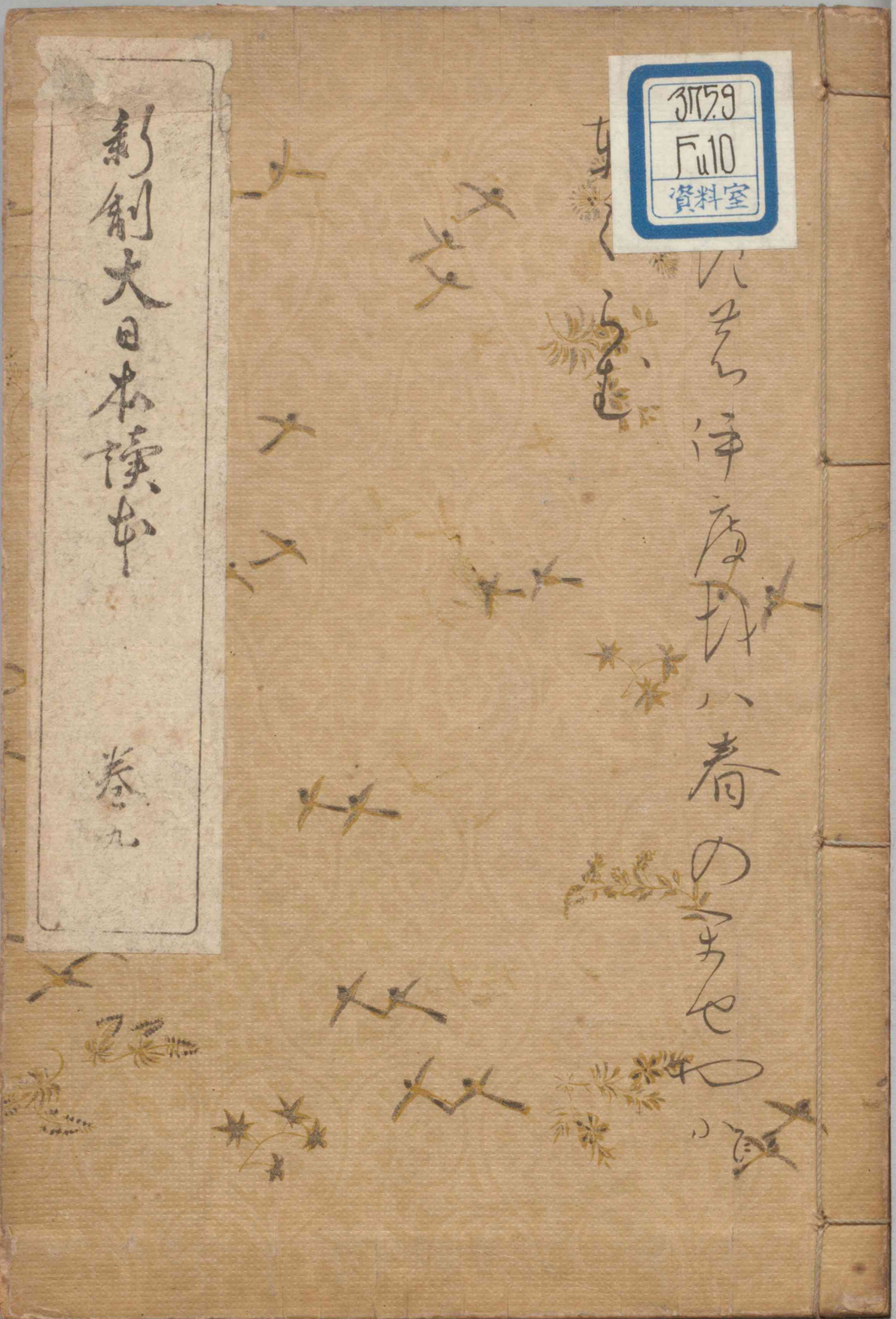


31759
Fu10
資料室

新刊大日本讀本

卷九

洋書城八春



375.9
Fu10

資料室

用科文漢語國校學中日九月一十年六和昭
用科語國校學業實日六月七年八和昭
濟定檢省部文

小學堂 藤村作編

新制大日本讀本

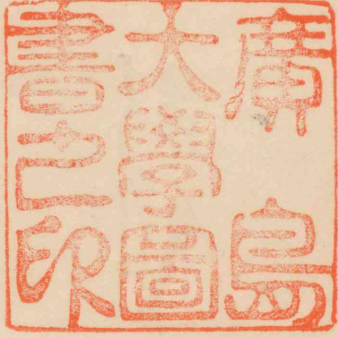
東京 大日本圖書株式會社



臣大の原菅 五

起縁神天崎松

公菅むし惜をれ別に花梅の殿梅紅



新制大日本讀本 卷九

目次

一	。自國を凝視して	二	荒	芳	德	一
二	奈良の春	笹	川	臨	風	一七
三	。萬葉佳調 (和歌)	(萬	葉	集)		二七
四	萬葉集の鑑賞	島	木	赤	彦	三〇
五	。菅原の大臣	(大		鏡)		三九
六	大鏡と道長時代	島	津	久	基	四四
七	南洲を生める環境	中	野	正	剛	五〇

目次

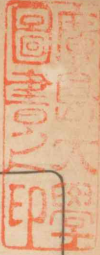
一

- 八 出陣の廬 (詩) 五九
- 九 日本人の性質及び理想 六二
- 一〇 寂光の院 七〇
- 一一 平家雑感 七九
- 一二 東下り 八六
- 一三 古文學の興味 九〇
- 一四 元祿の三文豪 九三
- 一五 幻住庵の記 九七
- 一六 芭蕉の生活 一〇三
- 一七 子規におくる書 一一七

- 土井 晩翠 五九
- 金子堅太郎 六二
- (平家物語) 七〇
- 高山林次郎 七九
- (伊勢物語) 八六
- 五十嵐 力 九〇
- 藤井 紫影 九三
- (猿蓑集) 九七
- 藤村 作 一〇三
- 夏目漱石 一一七

- 一八 八八 島 一二三
- 一九 五重塔 一三二
- 二〇 人臣の道 一四一
- 二一 我が國民の進路 一四三
- 二二 家の意識 一四五
- 二三 月の都 一五五

- (論曲) 一二三
- 幸田 露伴 一三二
- (神皇正統記) 一四一
- 永田秀次郎 一四三
- 和辻 哲郎 一四五
- (竹取物語) 一五五



二荒芳徳
明治十九年生。
法學士、伯爵、
貴族院議員。

一 自國を凝視して

二 荒芳徳

日本現時の思想界は紛糾を極めてゐるといふ。これは事實だ。しかし、これを以て秩序なき渾沌と観る事は當らぬ。予は寧ろ秩序ある紛糾と観る。

何故に「秩序ある紛糾」と観るかと云ふに、生命なき陋習を去つて、新しき生命を捉へんとする努力を動因とした紛糾であるからだ。

以下數個の題材を捉へて、新しき生命を直視せんとする現代の青年と、舊套を脱せざる老人との思想の相違に就いて吟味して見たい。

(一)

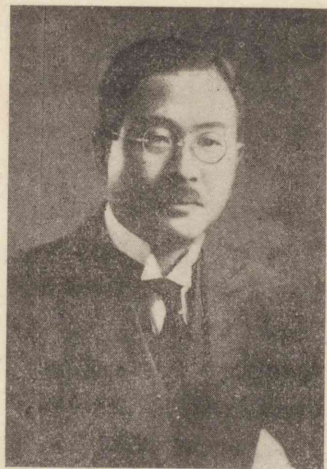
一部の青年は従來の忠君論に對しても、又愛國論に對しても

一 自國を凝視して

一

甚だしく不満を抱いてゐる。

從來忠君と云へば、常に直接、天皇及び皇室に對し奉る忠順なる行爲を稱し、愛國と云へば、常に直接、國家を對象とする眞摯無



私な活動と解せられてゐる。而して各個人の私生活、即ち直接に皇室又は國家を對象としない行爲は、如何に眞摯純誠なりと雖も、其は忠君愛國の行爲とは稱せられてゐない。

一例を以ていへば、或村に一軒の豆腐屋があつて、毎朝雨の日も、風の日も最も誠實に、清い、味のよい豆腐を作つて、戸毎に鬻ぐとする。從來の忠君愛國論からすれば、彼は固より君に忠なるものでも、國を愛するものでもない。併しながら、彼の豆腐は村

民の最も安心して買へるものであるとするならば、これは營に彼が自己の生業に忠なるばかりでなく、村民にも亦國家にも忠實なものであると言はなければならぬ。

又茲に一人の畫家があるとする。彼は特に口に國家に對する愛を言はぬ、又別に皇室に對する忠を言はぬ。併し、彼は名聞利達を餘所に、自己の畫道の研精に日も夜も足らず、彼の全生命を捧げて孜々として努めてゐるとする。この様な行爲は、直接には國家を對象としても居なければ、皇室を對象としてもゐない。しかし、彼自身はこれを自己自身の天職と觀じ、眞面目なる自己發現に努力する時、是は明かに彼が全生命を日本、我が國の榮光のために捧げつゝあるのであるから、彼を忠愛の國民なりと呼ぶに躊躇すべきでないのである。

之に反して、自ら忠君の士たるを自負し、口に愛國を唱ふる政

治家と雖も、彼の一舉一動が多く欺瞞を以て充たされ、目前の私利私慾を逐ふに急にして、國家百年の計を立つる努力を缺いてゐるならば、彼は斷じて忠愛者ではないのである。

(二)

今日の先輩は今日の青年の氣風を憂慮し、彼等が有する國家心の薄弱を慨嘆する。さうして焦慮躁心の結果、種々の對策を講ずるが、多くは肯綮に中らないで、徒に新時代人の反感を買ふが如きは、何故であるか。

予は今最も率直に明治時代人の忠愛心と昭和時代人の忠愛心との範疇が、甚だしく相異なる事實を、茲に述べねばならぬ。

明治時代を創造するに當つて掲げられた國民的目標は、勤王・討幕の大旗であつた。明治の大維新を完成したのは、先づ内治・外政に能力の乏しかつた徳川幕府を倒して、錦旗の下に國家を

神武創業の昔に歸さうとする國民先覺者の運動であつた。さうして、此の回天の事業は、上、明治天皇の御聰明、御果斷によつて、違算なく成就された。

明治維新の大業を恢弘にすると云ふ國民的生活信條は、その時代の各人の頭腦に頗る色彩鮮明に印せられた。明治時代の約四十年間は、國民は常に緊張の生活を續けた。曰く征韓論、曰く日清戦争、曰く北清事件、曰く日露戦争と、新興の日本はこれ等の大事件のある毎に、自己の實力の或は足らざるを怖れて、所謂人心慘として驕らざるの精神を保持して居た。

此の時代の國民思想を誘導したものは、皇室を絶對高位に置いた尊王主義であつた。この時代、天下は翕然として皇室に歸し「朝廷」「禁廷」「お上」等の一語は、端的に、直覺的に、その時代人に炎々たる熱情を燃えさせた。其には何等の説明も要しなかつた。

征韓論

副島・西郷等により明治六年朝鮮討伐の論起り
岩倉、大久保反對し廟議二派に分れた。

北清事件

明治三十二年清國に義和團と稱する外人排斥の黨亂起り、廿三年北京列國公使館を圍んだので我が國も列國と共に此を平定した三十四年講和條約成る。

(三)

明治維新の大業を翼賛し、先帝の賢臣良弼となつた諸卿は、國歩頻りに艱難を加へたその當時の日本を擔任し、眞に一身を捧げて、自己の信條に殉ずる意氣を有して居つた。さうして、終に新しい日本は此の時代に生れたのだ。

新しい日本の經營には幾多の困難を伴つた。而も維新を成就した人々は撓まず屈せず、明治天皇を中心として孜々營々新國家の再建に盡くし、終に日本をして世界列強に並馳するに至らしめた。

顧みるに、明治維新は實に目覺ましい且世界を驚倒させた民族的大創造であつた。如何に我が先輩たる時代人が、大膽に而も周到に且眞面目に、自己を凝視して創造を企てたかは、我々後の時代人として、實に欣羨に堪へぬ所である。

而も世人は、何故に此の大創造が巧みに違算なく運ばれたかと云ふ事については、明治天皇の御果斷を擧げ、國中雄藩の協力を數へ、義を觀て勇なる國民性を説き、外國の壓迫を因となすが常である。

これ等は固より皆重要なる原因ではあるが、而も尙一つ多くの史家の見逃してゐる一大原因がある。夫はこの時代に、日本は民族全體として大きな煩悶に逢着してゐた事である。

徳川三百年の治世は、太平が續いた、そして人心が緩んだ。凡ての階級は享樂を逐うて官能本位の樂しみに耽つた。物質慾は極むれば極むる程その深きに陥り、それと正比例して人の精神を餓ゑしむるものである事は、敢へて嘔々を要せぬ。

徳川の末世には、人心期せずして變を求め、精神的更生の熱烈な欲求は、表面人生の眞諦を忘れて享樂を逐ふやうに見えた人

人の胸の奥底に、一つの力強い潜勢力として存在してゐた。明治維新の大業の完成は、この國民的煩悶が主動因であつたさうして、英明なる明治天皇の出現によつて、王政復古てふ光彩陸離たる大旗を仰望し、一つの靈感的衝動によつて、期せずして億兆一心の團結を見たのである。

然るに昭和の今日、我が國民の状態は果してどうであらうか。國民は明治初代の如く民族の歸趨を示すべき大旗を求めてゐるが、これが未だ與へられてゐない。舊型の老人は依然明治時代の大旗を僅かに色を變へて、國民に向つて「この下に集れ」と叫んでゐる。日露戦争の後に、民心は倨傲の氣を生じた。理想なき所に貪婪生じ、信條なき所に佚樂生ずるは自然の數である。今日最も吾人の相互に弔ふべきは、吾人が或程度の迷へる兒等である事だ。

七

(四)

明治の志士が内憂外患交、到る國家的危機に際して、一死を賭して新日本の建設に努力した沈痛の體驗はなく、却つて維新の制度——制度それは明治時代の先覺者の遺贈である——の餘光を得、時流の幸運に棹さして、今日顯著なる地位を占むる人々が、果して能く今日の時代的煩悶を理解するであらうか。

今の社會的顯著者の多くは、實力才能に於てその儕輩を抜いた人々であらう。又縱令維新の畫策に關與しなかつた人々も、維新の精神を繼いで銳意これが完成に努めた人々である事も、我々は認めるに吝ならぬ。只我々の時代的煩悶が如何に強く如何に甚だしいものであるかと云ふ一事に至つては、恐らく諒解を夫等の人に希望するは無益な事であらう。何となれば、煩悶は人生の一つの特殊な精神的體驗であるからだ。

前述したやうに、明治維新の當時に於ては、皇室の一語は端的に皇室と國民との關係を心から結び付ける言葉として、當時の人心に驚くべき力を有つてゐた。今日の時代には、既に明治中葉時代までのやうに、國民が皇室に對して忠誠を竭くす以外に世界に對する日本の國家そのものの目標が表れて來た。従つて、最も簡潔に言へば、新時代の國民的目標は皇室に對して忠誠を竭くすと云ふより、寧ろ皇室と一心同體となつて日本を世界的に光輝あらしめようとする目標になつて來た。皇室を對象としてのみ我々國民は忠誠なるのではなく、皇室がその御信念として國家に盡くし給ふ所と、國民各自が自己の生活信條として國家に盡くす所とは、全く一致して不二なるが故に、國民は必然に皇室に對して忠誠である結果を生ずると考へるやうになつたのである。

換言すれば、今日の時代には皇室は日本民族の最上位に在つて、國家に對して御忠誠であり、國民各個は日本民族の構成分子として祖國に忠誠なる結果は、當然に又必然に皇室に忠誠であるとするやうになつたのである。

この主張は、斷じて一家言ではなく、實に史籍の上に炳乎たる日本建國の大理想であり、我が國體の矜誇である。

希望に輝く新進の現代青年は、世界全體を視野とし、日本帝國をして世界眞善美化の國際分擔を果さしむる爲に、先づ自國を第一に神聖・義勇の國家たらしめんとしてゐる。彼等に對して世界を視野とせぬ狹量なる忠義を説いても、容易に彼等をして首肯・信服せしむることは出來まい。

何となれば、現代青年の忠誠は日本國全體に對するものであ

り、同時に日本國民として世界人類に對するものであらねばならぬからである。

今の老年の多くは、既に軌道に乗つた明治時代の日本を經營し來り、概して順調な日本を預つて來た。故に多くは眼前の事實を重視し、遠き將來の計畫を輕んずる傾向がある。然るに、現代の青年は一度校門を出ると、その接觸する社會は學校で想像したやうな立派な社會でなく、國家は天然資源の缺乏、人口の過剩、國際關係の窮況等に立つを見て、日本民族は將來如何にして世界に立つべきかの問題に想到して、うら若いその胸裡には遂に煩悶なきを得なくなるのである。

此の如くにして、現時代の青年は時代的煩悶と環境的煩悶との眞中に佇立する。人心殆からざらんとするも豈に得べけんやである。

抑、我が皇室と國民の關係は、これを例せば恰も日輪と日光の如きものである。日輪の赫々と輝き、吾人をして仰がしむる所以のものは、その日光が輝々として照り渡れるからである。日光照らざれば、日輪恆在すと雖も、吾人は日輪の存在を常に確認する事甚だ困難である。夫と同じ様に、國民が自らその行爲、行動の上に於て輝くならば、皇室の御光は夫と正比例して輝く。國民輝かざれば、皇室の御光も亦輝かぬのである。

日輪は中心で、日光は延長である如く、皇室は中心で、國民は延長であると云ふのは正しい見解だ。同時に、日光なくんば日輪の日輪たる所以なきが如く、國民なくんば皇室の皇室たる所以はないと云ふ見解も正しい。また日光は日輪を離れては存在しない如く、國民は皇室を離れては存在しないと云ふ事も正しい。日本の魂(又は生命)と日本人總てとは離れて存在し得ない。

ものである事を確認する者は、皇室なくては我々は日本國民として存在しないものであることも確認するであらう。皇室と國民との共同始祖に渡らせられる皇祖宗を中心とし、君民一體となつて各、自己の分擔によつて民族的理想の實現に盡瘁すべき大抱負、大信念を培養、生長させて行くことが、今日の急務である。老年も青年もこの點に於て一致しなければならぬ。

(六)

我が歴史や乃至國民道德の書は、天皇の御仁慈、皇室の御愛民の御事蹟を多々記述してゐるが、天皇の御徳は仁慈愛民といふやうな對國民的なことに止らず、もつともつと深い民族的信念に根ざしてゐる事を忘れてはならぬ。日本國民は古來國家、天皇に對しては一死を以て盡くしてゐるが如く、天皇及び皇族も祖宗及び國家に對しては國民の先頭に立たせられて、御忠誠を

五瀨命

神武天皇の兄君
河内國草香で
長髓彦の兵と戦
ひ流矢に當つて
おかくれになつ
た。

日本武尊

御名は小碓尊
景行天皇の皇子
龜山天皇
人皇第九十代。

御竭くしになつた。歴史に現れた、神武天皇の御東征に皇兄五瀨命を失はせられた悲壯な事實や、日本武尊が僅か十六歳の御身を以て、艶麗なる少女に身を扮して巨賊熊襲を誅せられた決死的奇襲や、龜山天皇が元寇の際、身を以て國難に代らんと伊勢神宮に御祈誓あつた事や、近くは明治天皇が衆に先んじて、維新の大業を御斷行になつた献身的御行動の如き、皆これである。歴代天皇の勅語の中に表れた御詞にも、祖宗に對する御責任より、現國家の美化、淨化、善化を御天職となさせられる、祖宗に對し將又國家に對する、實に純眞な忠誠の御精神を拜することが出来る。

抑、天皇、皇族が國家に御忠節を御盡くし遊ばされる事と、國民が國家皇室に對して忠順なる事とは一に歸して、祖宗の遺訓を恢弘にする所以であつて、君民忠節の對象は祖國自身であり、國

體自身であり、更に語を換へて言へば、國家人格の發揚と云ふ一事が、君民の同始祖たる皇祖皇宗の遺訓(即ち民族的理想)によつて統括されてゐる。これが他邦の追隨を許さぬ重大點である。

(七)

要するに、現今日本の思想界は紛糾してゐる。しかし、これは正に、新しき思想を産まんとする序曲としての紛糾であり、寧ろ秩序ある紛糾である。もしこの潜勢力ある紛糾の真相を究めずして、輕々に事を斷ずるならば、その結果は却つて、日本の偉大性を完成する障礙となるであらう。

嗚呼、人類この地上に生じて數萬年、東西の二大文明の生じて數千年、この二者が日本なる東海の列島に相會して數十年なるを考ふれば、日本の思想界の紛糾するのも寧ろ當然であらう。さうして、この紛糾を姑く第三者の地位に立つて大觀すれば、寧

ろ思想界の大壯觀である。

急流相會する所波濤高く騰り、潮勢相回る所、旋渦深く沈むやうに、日本の思想界は現に沸き立つてゐる。

この荒海を乗り切るを得るか否かは、只國民の自信と膽力との如何に由る。新忠君愛國者は必ず輩出するであらう。民族的自覺者ははや擡頭しつゝある。さうして、それ等の忠君愛國者、自覺者は古い忠君愛國者に對する一つの抗議者であり、同時に自國總體を凝視した復古論者であるであらう。

二 奈良の春

笹川臨風

四季の風景中、奈良の格別すぐれて居るのは春である。

奈良や三輪あたりの町家には、東風が暖簾をそよ／＼と吹い

笹川臨風

本名は種郎、明治三年八月東京神田に生れた。文學博士。

三輪

奈良縣磯城郡。

飛火の野守

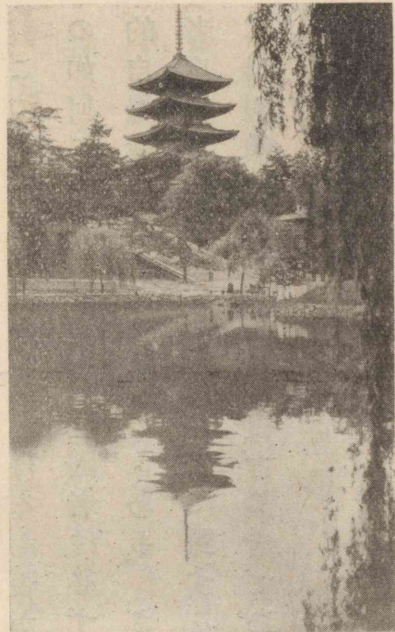
春日野の飛火の野守出でて見よ
いま幾日ありて
若菜つみてむ
(古今集)

咲く花の

あをによし奈良の都は咲く花の
匂ふが如くいま
さかりなり(萬葉集)

猿澤の池

興福寺の南崖下、率川(イサカハ)の水を湛ふる池。



猿澤の池

て居る。河内の山々には霞がたなびいて、麥秀づること五六寸、菜の花は隈なく、金色の浪を打ちて、その間を紫雲英の紅が交織に彩る。雲雀の聲はをちこちに朗かに聞えて、遙に畝傍、耳無香具の三山が幻のやうに見える。春の大和路は眞に長閑である。大宮人は春日野の飛火の野守に若菜の摘み頃を尋ねた。げに「咲く花の匂ふが如く」と謳はれた奈良の都は、春日熙々たる情景に溢れてゐたに相違ない。

猿澤の池水が温んで、衣掛柳の芽が青くふくらんだ頃に、奈良見物の旅人はぞろ／＼と奈良驛でおりる。春日から大佛へか

春日の巫女

春日神社にゐる巫女。

二月堂

東大寺二世實忠開基。當山第一の最古の建物。

三月堂

二月堂の前面。東大寺に屬する法華堂。若草山麓の高所にある。一に金鐘寺とも云ふ。

若草山

東大寺の東にある。又手向山とも云ふ。小芝生の山。

佐保山

奈良縣添上郡佐保村。一に棹山に作る。

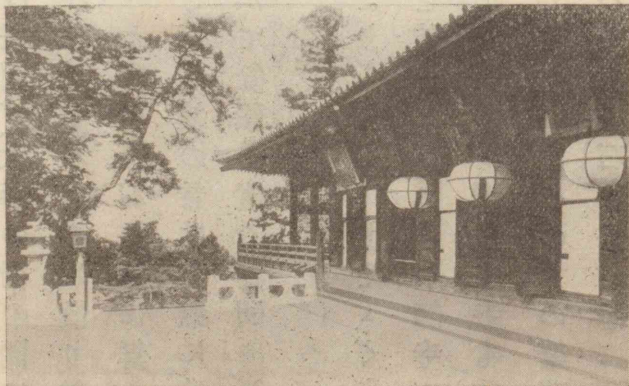
佐保川

奈良坂の東に發源して南流す。大和川の上流。

武藏野

春日野の別名。

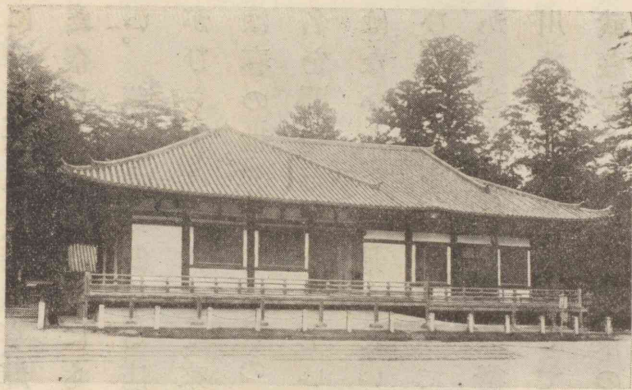
けて、土産物を賣る店々の呼聲にも自ら春風の情味が湧く。朱に、青に、金色に、美しく、輝かしく彩られた奈良人形は、如何にも春にふさはしい。蕨餅、火打餅賣る店の檐にも、落花がひらく／＼と舞つて來る。實に奈良は春の世界だ。春日の巫女とは、その名を聞くだに春らしい情緒を唆るてはないか。二月堂といひ、三月堂といひ、春の名を既に負うてゐるではないか。若草山は春を象徴し、佐保山、佐保川は春の心を表現してゐる。同じく武藏野といふが、關東のそれは秋月を聯想させるが、若草山の裾にある武藏野は若菜摘の情景を偲ば



二月堂

藥師寺
奈良縣生駒郡に
ある。法相宗大
本山。七代寺の
一。本尊藥師如
來をまつる。

大佛殿
東大寺の中堂。
本尊の大佛此の
中にある。



せる。二月堂の高欄に凭つて遙に故都を俯瞰する時、言葉以上に奈良の春は長閑で、大杉の樹の間に咲き亂れた花は風もないのに散り、絲遊はちら／＼と古い礎石の邊に舞ふ。一つ二つ撞きだす鐘の音は、大氣に溶け入りて、やがて餘韻を遠く雲間に漂はせる。

三
春雨の絲よりも細く降りそゞぐ日に、更に故都を訪ねて見よ。藥師寺の古塔は煙りて見えわかず、法隆寺も靄の中に霞んで見えぬ。その古の繁華の名残である一木一石は、悉く雨に濡れて春愁の情は無言の裏に深い。大佛殿は寂寞として、八角鑄

南大門
大佛殿の正門。
正治元年再造。
名工
運慶及び快慶の
こと。

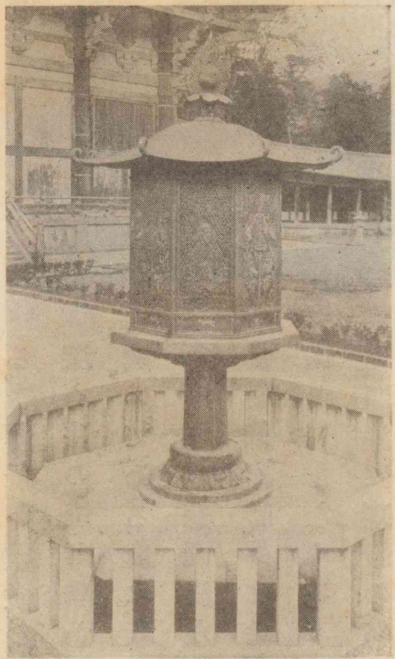


藥師寺の塔

透しの金銅燈籠は物淋しく佇んでゐる。名工が鍛へに鍛へた腕で彫刻した南大門の仁王像は、たとへ浮世に如何なる變亂があらうとも、一切人界を超越して、永劫に藝術の春を誇りげである。薄暗い殿堂の奥深く法の燈が幽かに瞬いてゐる處に、崇高尊嚴な、慈悲圓滿な御佛を仰ぐ時、外には春雨が音もなくそゞいで、四邊に森嚴の氣が漲る。目が互えて、幽かな光が漸う明るくなり、我なく、執なく、現世を超越して、渾然として佛の懷に抱き入れられる心地がする。その佛像は、一千年

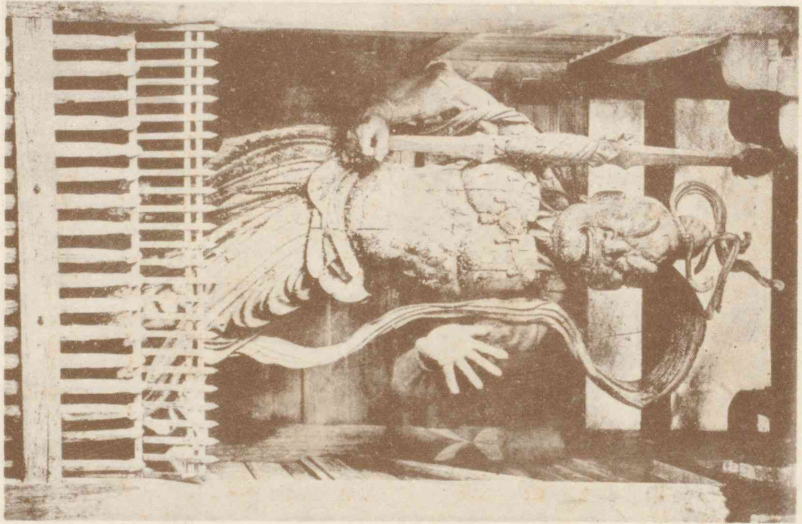
の古、非凡な藝術家が強く燃ゆる信仰の力を注いで、打ちおろす鑿の痕ごとに自信の緊張を示した名作である。かかる名作に對して見れば、藝術が既に信仰であり、鑑賞も亦信仰である。

奈良の文化は春の文化であつた。奈良の古藝術も亦春の藝術であつた。さうして、藝術の奈良は彫刻の奈良である。推古朝より鎌倉時代に至るまで、幾多の名人・巨匠が心血を漉いだ製作の、幸に今日に傳はる物も多く、其等に依つて當代の文化を追想し得ることを祝福せねばならぬ。其等の藝術品は單に我が邦だけに止まらず、實

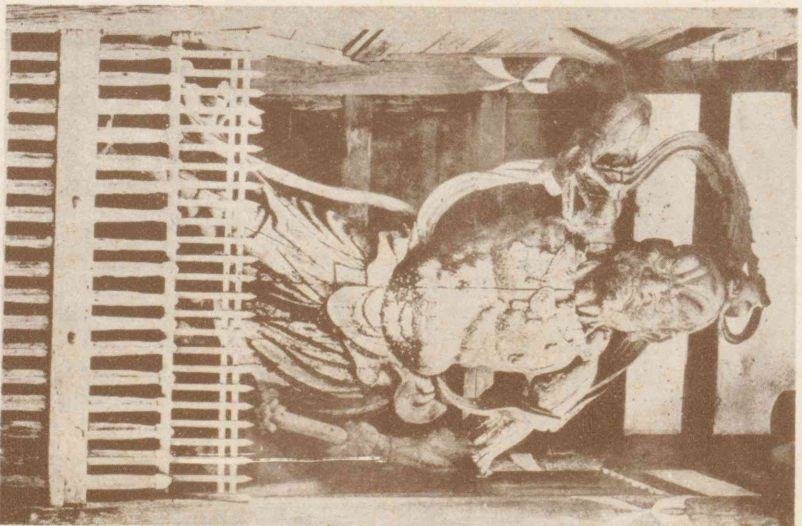


大佛殿前八角金銅燈籠

推古朝
人皇第三十三代、女帝推古天皇の御在位時代をいふ。



慶運・快慶作



東大寺南大門の仁王像

唐

隋の後に當り、
日本紀元一二七
八年、推古天皇
の廿六年、高祖
武徳帝によつて
起つた。

に世界的の藝術品である。

將來せられた唐代の文化が加はつて、七堂伽藍となり、崇高なる佛像となつて、茲に日本文化の光は赫灼として輝いたのであつた。その影響、その感化は固より唐代の文化に多謝すべきものがあるが、藝術の日本が藝術の唐に對して更に遜る所のないのは、欣快の極みである。

さすがに五丈三尺餘の大佛を建立する程あつて、奈良の藝術は極めて規模が大きかつた。一面には懺悔滅罪の清淨を現して高雅端嚴であると共に、他面には信仰敬虔の熱烈さを表して雄偉瑰麗なものであつた。巨匠が互えた腕に打下した鑿の一刻一刻には、溢るゝ力があり、焼くが如き熱があり、心血俱に瀝下して、藝術の香は繽紛として高かつたのである。名利を忘れ、我欲を離れ、ひたすらにその藝術に打込まれた名匠の魂は、その作

天平時代

聖武帝が天平と改元されて以來、孝謙・淳仁・稱徳の三朝に天平勝寶八年、天平寶字八年、天平神護三年の年號がある。佛教興隆時代で、美術工藝の進歩著しく、世に此を天平時代と云ふ。

聖徳太子

厩戸皇子を尊んで聖徳太子と呼び奉る。用明天皇の第一皇子、推古帝廿九年薨、四十九。

品の裏に磅礴して、燦爛として輝いてゐる。

天平時代に於ける奈良は佛地であり、淨土であり、極樂世界であつた。併し、遷都とともに逝く春の名残をとどむるのみで、盡きやらぬ春愁は到る處に遺されてゐる。ただ藝術の春のみは久遠不滅の壽を保つて、世界的古文化の薫は高い。

白法隠没して鬪諍修羅の世が多いのに、その間にあつて、この世からなる極樂淨土を現じ、懺悔滅罪して平和の春を出現させようとなされた聖徳太子や、聖武天皇の御理想は高遠で、その御徳は洪大無量である。人類の理想はそこにある。その理想を現實化して、平和の世界、理想の天地を目前に現したのが天平時代であつた。併しながら、人間が罪障から永久に脱離することは容易でない。既に天平の世でさへ、玄昉の我執、廣嗣の我執があつて、いがみあつてゐたではないか。平和の中心で、理想の權

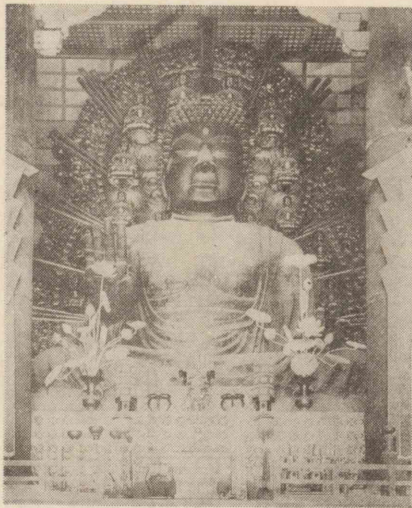
盧舍那佛

摩訶毘盧遮那佛の略。

七大寺

東大・興福・南無・大安・藥師・西大・法隆の七寺。

化で、信仰の對象であつた盧舍那佛の巨像でさへ、度々の劫火に焼かれたではないか。梵唄・鐘聲に全都を搖がした七大寺の大伽藍も多く荒廢したではないか。藝術の春を誇る諸佛の靈像



奈良の大佛

さへも蜘蛛の網に閉され、或は手足離散の憂目に逢はれたてはないか。平和の春は久しくなかつた。人界に描き出された極樂淨土は遂に永遠のものではなかつた。

けれども、よしその理想の實現は刹那の壯觀であつたとは言へ、人間歸趨の目的點はここに在る。世界を舉げて齊しく平和の春を樂しむべき時が到來せねばならぬ。人類は我執の偏見に囚はれる現状から更に進み

出てねばならぬ。奈良に遊んで天平時代の平和を回顧する時、
 旺然として理想の現實化を思はざるを得ない。
 かく考へ到ると、古美術の都、奈良は、決して過去の遺物ではな
 い。徒に古文化の奈良を稱讚するだけでは物足らぬ。古名匠
 の腕の互えを歎美するだけでは能事足れりと謂はれぬ。奈良
 に於ける理想の現實化を、廣く、深く、強く、永遠に復活させねばな
 らぬ。過去の華やかさにのみ憧憬するの愚を已めよ。過去と
 ともに、我等の眼前には現在があり、未來が横たはる。我等が古
 文化の跡を尋ね、古藝術の香に酔はむとするのは、玩物喪志の爲
 でないのは無論である。
 悠久なる平和の春よ、早く人間界に歸り來れ。古美術の都、奈
 良の春は、我等にかくあれかしと教へてゐるのではないか。
 (自然と文化との諧調に據る)

柿本人麿
 持統・文武兩朝
 に仕へた萬葉集
 第一の歌人。

山上憶良
 萬葉歌人中、外
 來思想の影響を
 多くうけ、若い
 時渡唐したこと
 があり、後筑前
 守に赴任した。

三 萬葉佳調

淡海の海、夕浪千鳥汝が鳴けば、

柿本人麿

こゝろもしぬにいにしへおもほゆ。

ひむがしの野にかぎろひのたつ見えて、

山上憶良

かへり見すれば月かたぶきぬ。

いざ子ども、早くやまとへ大伴の

三津の濱松まち戀ひぬらむ。

筆蹟

雜歌
泊瀬朝倉宮御宇
大泊瀬幼武天皇
御製歌一首
暮去者、小椋山
爾、臥鹿之、今
夜者不鳴、寐家
良霜。
ゆふされはをく
らのやまにふす
しかのこよひは
なかついねにけ
らしも

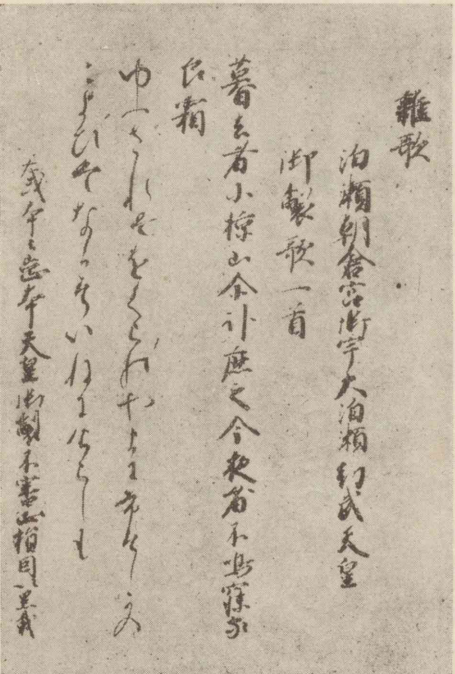
山部赤人

自然の愛にひた
つた自然歌人。
短歌の才に傑れ
てゐた。
萬葉歌人として
人麿と雙び稱せ
られる人。

しろがねもこがねも玉も何せむに

まされる實子にしかめやも

雜歌



集葉萬本紙藍

山部赤人

田子の浦ゆ、打ちいでてみればましろにぞ

ふじの高嶺に雪は降りける。

若の浦にしほみちくれば鴻を無み、

葦邊をさしてたづ鳴きわたる。

大伴旅人

ここにありて筑紫やいづく、白雲の

たなびく山の方にしあるらし。

あが岡の秋萩の花風をいたみ、

散るべくなりぬ見む人もがも。

大伴家持

大伴旅人

老莊思想の影響
をうけた萬葉歌
人。名家大伴家
に生れ、從二位
大納言にまで昇
つた後、宰相に
なつて筑紫へ赴
任した。
大伴家持
旅人の子。
初め宮内官にな
り、次に越中に
國司として赴任
したが、晩年は
左遷の悲運にあ
つた。

大伴のとほつ神祖のおくつきは、
しるくしめたて人の知るべく。

丈夫は名をし立つべし後の代に、

聞きつぐ人も語りつぐがね。

四 萬葉集の鑑賞 島木赤彦

私は、歌の上に常に萬葉集を宗としてゐる。それは、萬葉人の歌ひ方が、常に眞實な心の集中からなされ、現れた所は緊張の聲調、高古の風格となつて、吾々をして常に頭をその前に垂れしめるからである。私は、自ら喜んでその前に頭を垂れるといふやうな對象物が、吾々の面前に存在することを幸福と思つてゐる。私は、歌を作るほどの人は、誰でも萬葉集の心に終始すればい

島木赤彦

本名は久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年歿、年五十一。

萬葉集

全廿卷。仁徳帝の御宇から淳仁帝の御宇まで四百五十年の和歌四千四百九十六首をあつめた日本最古の歌集。

いと思つてゐる。萬葉集の心は、吾々が歌に入る第一歩の心であらねばならぬと共に、歌に果てんとする最終歩の心であらねばならぬと思つてゐる。それほど、萬葉集は歌の命を正しく、深く、豊かに盛つた歌集である。

それならば、萬葉集の歌の命とする所は如何なる所にあるか。それは、第一に自己の眞實に徹してゐるといふ點にある。歌の命が、作者の眞實性と終始するといふほどのことは、誰でも承知してゐる。平凡事であるが、その平凡は、吾々が日々に浴してゐる日光の平凡にして貴重、大切なるが如きものである。日光が生物の命と終始するが如く、眞實は歌の總べての正しい生長と終始する。

今の世は、人間が増殖して、人と人との接觸が多いために、生活精神が多方面に分岐して、分岐の個々に力が薄く、力の薄い個々が

一點に集まつて強大な力となることも少く、一面、社會的興味に伴ふ世間氣ともいふべきものが割合に多く發達して、個々独自の根柢所に徹して生活するといふ風な心持が稀薄になつてゐる。歌がやはりそれであつて、今の人の作る歌は、往々にして力

筆蹟
谷かけに苔むせ
りける仆れ木を
息つき踰ゆる
われ老いにけり
赤彦

谷
かけ
る
苔
む
せ
り
け
る
木
を
息
つ
き
踰
ゆ
る
わ
れ
老
い
に
け
り

鳥木赤彦筆蹟

が薄く、その上、ともすると、世間氣が多く交つて來る。つまり世間の流行とか嗜好とか、批評・評判とかいふものを目安に置いて歌を作るから、自己内心に湧き來る眞情に直面して、専心にその眞情に即かうとする熱意を疎かにする。それゆゑ、作る所の歌

が底力を備へて、惻々として人を動かすほどの權威を持ち得ないのである。

これは、又、一面からは今世人の過度なる理智の發達とも關聯してゐる。今世人は理智の力を以て、容易に敏速に藝術に唱へらるゝ主義、主張の輪廓を知り得る。容易に知り得る所を目安として、早く自己の藝術をそれに當て嵌めようとするから、その間に上滑りや輕薄が伴なひ易いのである。理智の理解と眞の到達との間には時間があり、距離がある。距離と時間とを省略して到達を簡便にしようとする所に今世人の弱所があるのであつて、今の世にある多くの歌が、多く底力を缺くのは、如上の事情から、何所までも自己の眞實に即かうとする根強さを疎かにするためであらうと思はれる。さういふ弊所をもつてゐる今世人であるから、徹頭徹尾自己の眞實に終始してゐる萬葉集の

歌に接して、之を親愛し、之を尊敬して、居常その薰化と保育を受けることは、吾々歌人に最も必要なことと思ふのである。

元來、理想は單なる理想として考へられるよりも、それが具體的な現れとなつて示される時、鮮かに吾々の感動を刺激する。

萬葉集は、歌の根本義として吾々の希求するものの一大具現であり、特に、それが吾々上古祖先の所産であつて、その中に吾々の血液の源泉が鮮やかに見出されるのであつて、それによつて吾々の感受を常に新鮮にすることは、同時に自己の生命を新鮮に保つことになるのであつて、斯かる歌集が千餘年後の吾々に貽されてあることは、大なる幸とせねばならぬのである。

元來、萬葉集は、仁徳天皇の御宇から、淳仁天皇の御宇天平寶字三年に至る四百五十年間の歌を輯めたものであるが、舒明天皇以前のもものは極めて少い。舒明天皇以後のものを三期に分れ

天武天皇

人皇第四十代。

明日香地方

大和國高市郡に

當る。

持統天皇

人皇第四十一代

文武天皇

人皇第四十二代

元明天皇

人皇第四十三代

ば、舒明天皇より天武天皇に至る約五十年間が前期であつて、主として明日香地方に朝廷のあつた時代である。それから、持統文武兩帝約二十年間が中期であつて、主として藤原に朝廷のあつた時代であり、萬葉集



防人 (伊東紅雲筆)

としては歌の最も頂上に到達した時である。

それから以後は奈良期と言はれる時代になるのであつて、元明天皇より淳仁天皇に至る約五十年が後期になるので

ある。第一期には未だ特別な歌人と言はれる人が出て居らず、第二期に入つて人麿赤人の如き代表的歌人が出て居り、第三期

防人

王朝時代西海道
邊要の地を守つ
た兵士。

狹野茅上娘子
萬葉の末期の女
性歌人の一人。

には山上憶良・大伴家持などの代表的歌人が出て居るが、この期の代表的歌人は、何れも人麿や赤人に比すべき歌人ではなく、却つて無名の作家、例へば關東から西陲の守備に遣された防人などの歌に生き生きしたものが見えて居り、狹野茅上娘子の如き一少女の歌に痛切な叫びが聞かれてゐるといふ有様である。
眞實は、又、その一面が素樸率直となつて現れる。萬葉集の歌特にそのうちの前期ともいふべき時代の歌は、如何にも素樸率直な歌が多くて、子どもが無邪氣な口つきから出る言葉や、地團駄を踏んで泣き叫ぶ聲を聞くが如き感じを與へる歌が多く、それが何れも自己の眞實に根ざしてゐるから、些の厭味を交へないのである。この期の歌は、多く喜怒哀樂といふが如き單純な感情が歌はれ、その感情が純粹一途に集中してゐるから、作者自ら知らざるに、自ら人生の機微に參し得てゐるといふやうな快

和銅元年代中

天皇御製

丈夫と頼乃音る奈利物部乃大臣楠立良思母
よすらすをのとれむとすんやものうれおほよ

東宮御名部
天皇御製
御名部皇女奉和御歌

台大と物莫御念須賣神乃嗣而賜流去莫勿久尔

元曆本校萬葉集

い境涯がある。句法に繰返しが多きは、子どもの言語に繰返しの多いのに似、一語々の響にも訥々たる幼さがある。

中期に入ると、歌が追々藝術的に進んで来て、中に、人麿赤人の如き大きな歌人を出して、それらを中心として生れた當時の歌の中には、藝術としての至上境と思はれる所にまで入つてゐるものがあるのであるが、それらの歌が、何れも素樸や率直から離れてゐないのであつて、つまり、自己の眞實に徹して歌はれてゐるから、至上境として眞の力を持ち得るのである。この期の歌は、初期に比べると、歌の範圍が人事自然の各相に互つて擴がり、而も、それが豊かに満ち高く張つて、藝術の要求する崇高性・嚴肅性といふが如きものを持ち得て、或ものは圓融具足の相に入り、或ものは暢達流動の相となり、或ものは高邁、或ものは蒼古、或ものは明澄、或ものは沈潜の姿となつて現れてゐるのである。

後期に入れば、中期の藝術的方面を更に藝術的に押し進めて
ある人々が現れると共に、萬葉の素質的方面から離れはじめるといふ現象も伴ひ、それらの人々には理智的な觀念的な歌がぼつ／＼あらはれ、後に現れる古今集の歌風などへの橋渡しをするといふ觀があるけれども、大體に於ては、やはり萬葉集の眞髓を捉へて中期の歌風を繼承したといふべきである。

全篇四千五百首の歌、多くは、吾々の尊敬すべき命をもち得るに於て十分である。即ち、吾々が萬葉集を仰望するのは、單に眞實性の現れなるが故といふのみでは盡くして居らぬ。それらの素質を押し進めて、藝術の至上所に到達せる歌の種々相から深い感銘を受ける爲である。

(萬葉集の鑑賞と其批評)

五 菅原の大臣

時平
藤原基經の長子
左大臣。道眞と
共に醍醐帝を輔
く。門地を恃み
て裁決多く當を
失した。

菅原氏

元、土師氏、野
見宿禰の裔、世
世儒臣として朝
に仕へた。道眞
は是善の子、詩
文に巧みで式部
少輔兼文章博士
となり醍醐帝に
仕へた。

醍醐の帝の御時、時平のおとど左大臣の位にて、年いと若くおはします。菅原のおとどは右大臣の位にておはします。そのをり、帝御年いと若くおはします。左右大臣に世の政行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり左大臣御年二十八許なり。右大臣の御年五十七八許にやおはしましけん。共に世の政をせしめ給ひしほどに、右大臣はさえ世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきてもことの外に賢くおはします。左大臣は御年も若く、さえもことの外に劣り給へるによりて、右大臣御覚えことの外におはしましたるに、左大臣安からず思したるほどに、さるべきにやおはしけん。右大臣の御爲によからぬこと出て來て昌泰四年正月二十五日、太宰權帥になし奉りて、流され給ふ。

亭子の帝
宇多天皇。



（るよに巻繪起縁野北） るらせ遷左眞道

このおとど子供數多おはせしに、女君たちは
 婿どりし、男君たちは皆ほど／＼につけて、位ど
 もおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲
 しきに、幼くおはしける男君女君たち、慕ひ泣き
 ておはしければ、ちひさきはあへなんと、おほや
 けもゆるさしめ給ひしかば、ともにおてくだり
 給ひしぞかし。帝の御掟極めて生憎におはし
 ませば、この御子どもを同じ方にだに遣はさざ
 りけり。方々にいと悲しく思召して、御前の梅
 の花を御覽じて、
 こちふかばにほひおこせよ梅の花
 あるじなしとて春なわすれぞ。
 また亭子の帝に聞えさせ給ふ、

ながれゆくわれはみくづになりはてぬ、

君しがらみとなりてとどめよ。

なき事によりて、かく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やがて
 山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに
 心細く思されて、

君がすむやどの梢をゆく／＼と、

かくるゝまでもかへりみしはや。

また播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふ所に御
 やどりせしめ給ひて、うまやの長のいみじう思へる氣色を御覽
 じて、作らせ給へる詩いと悲し。

驛長無驚時變改、一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし着きて、ものあはれに心細く思さるゝ
 夕べ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば、野にも山にもたつけぶり、
なげきよりこそもえはじめけれ。



(起縁神天崎松) 圖の持捧衣御賜恩

また雲の浮きて漂ふを御覽じても、
山わかれ、とびゆく雲の歸り來る
かげ見るときぞなほ頼まるゝ。
さりともと世を思しめされけるな
るべし。月のあかき夜
海ならずたゝへる水の底までも、
きよきこゝろは月ぞてらさむ。
これいとかしこくあそばしたりか
し。げに月日こそは照し給はめと
こそはあめれ。
筑紫におはします處の御門もか

観音寺

觀世音寺とも云
ふ福岡縣筑紫郡
に屬する。中世
衰廢し僅に舊跡
を傳へてゐる。

文集

白樂天の詩集
「白氏文集」

白居易

中唐の人。白樂
天といふ。作詩
多く、長恨歌、琵琶
行等に著名で
ある。

ためておはします。大貳の居處は遙なれども、樓の上の瓦など
の心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ
寺のありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。
都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲。これは文集の白居易が「遺愛
寺鐘敬枕聽、香爐峯雪撥簾看」といふ詩にもまささまに作らし
めたまへり。とこそ昔の博士どもは申しけれ。
またかの筑紫にて九月十日の菊の花を御覽じけるついでに、
まだ京におはしまししとき、九月のこよひ内裏にて、菊の宴あり
しに、この大臣の作らせ給へりける詩を、帝かしこく感じ給ひて
御衣賜はせ給へりしを筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽
ずるに、いとどそのをり思召し出でて作らせ給ひける。

去年今夜侍清凉、秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香。

大鏡

道長を中心とした歴史物語。

島津久基

文學士。國文學者。もと東大文學部助教授。

現、東洋大學教授。

道長

世に法成寺入道前關白太政大臣

又は御堂關白といふ。

文德天皇

人皇第五十五代

後一條天皇

人皇第六十八代

冬嗣

世に閑院大臣と稱する。弘安三年薨、五十二歳。

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。

かくて、このおとゞは筑紫におはして、延喜三年癸亥二月二十
五日にうせたまひしぞかし。御年五十九。

(天鏡)

六 大鏡と道長時代

島津久基

大鏡は、太政大臣道長の榮華に對する祝詞である、賀詞である、
吉詞である。

同時に、この道長の榮華と權勢の由つて來る所以を説く爲に、
道長以前の藤原氏一門の消長、特に道長に傳へられて來た權勢
の推移に直接關係ある皇室の御系統、即ち文德天皇から後一條
天皇までの御代々の御上と、冬嗣以下藤原氏堂上權力の中心で
あつた人々の傳を物語るのである。これは卷頭に世繼の翁の

御堂殿時代

道長を御堂關白

と呼べるため、

道長在世時代即

ち藤原氏全盛期

を御堂殿時代と

呼ぶ。

六國史

日本書紀、續日

本紀、日本後

紀、續日本後紀、

文德實錄、三代

實錄の六史を云

ふ。

口を藉つて闡明してゐる所である。

大鏡と共に平安時代の末に近く成つた歴史物語に榮華物語
がある。兩書とも世繼といふ名で呼ばれて、御堂殿時代讚美の
回想記である點と、純假名文の國史である點で全く一致してゐ
るので、頗る混同され易い。從來勅撰の六國史はあつたが、いつ
れも漢文で書かれたもので、假名を以て書かれたものには歌書
物語日記などの外なかつた。然るに時代の流れは勅撰が漢詩
文集から和歌集の方に移つていつたと共に、爰に新しい純國文
の國史の新様式を生み出して來たのである。又、時人歎稱の的
であつた道長が薨去して、榮華を誇つた藤原氏も漸く衰運に向
つて來た時分に、その華やかであつた頃の追憶が懷しまれて來
ると共に、その心持をよく、詳しく表現し得べきあゝいふ新しい
様式の出現したのも、極めて自然であつたと考へられる。榮華

のであるといふことである。中にも、人生の榮枯に關して宗教的に信ぜられて居るのは、所謂宿世であり、又現實の宮廷生活に最も重大な關係を有するものは、うしろ見の有無である。社交と、藝術と、政争と、美の情趣の鑑賞と、權勢獲得の誇と、殿上の遊・祭行幸物語、さては、物怪・祈・占、即ち源氏物語を通じて想像し得られる御堂殿時代の生活の實證が、こゝに提供せられてゐるばかりか、それと共に、自己の榮達を計らんが爲に、時としては手段を擇ばぬ醜い非人道な權謀が、幾多の悲劇を生んだ政治上表裏の眞相が鮮明に示されて居るのである。

大鏡に道長のことを「世間の光」といひ、又「只世の中はこの殿の御光」と言つて居るのは、源氏物語に倣つた口調であるが、亦事實御堂殿時代の權貴者として、時人の所謂權者ごんじやの道長の光は、源氏物語の中の光君の光とたぐへらるべき、いみじく、かゞやかしい

紫式部

藤原爲時の女、
宣孝の妻、一條
天皇の中宮彰子
に仕へた。源氏
物語の作者。

清少納言

清原元輔の女、
一條天皇の皇后
定子に仕へた。
枕草子の作者。

ものであつたのであらう。光源氏の榮達の外面的生活に、道長時代の影が著しく反映されて居る事は何人も否み難いところであらう。つまり源氏にあらはれた世界は、理想化物語化せられた御堂殿時代であり、又大鏡榮華物語のそれは、時代人の理想に一致した御堂殿時代の實寫であると言ひ得る。この點に兩者の密接な交渉がある。道長時代、即ち一條天皇前後の時代は紫式部や清少納言の活躍した時代である。時の秀才才媛の手に成つた物語・隨筆・日記等によつて、窺ひ得る生活が、もつと端的にもつと組織的綜合的な觀方で、且政治的に物語られたのが大鏡であり、榮華物語である。特に大鏡は、作者の藝術的精神が或批判的精神と混融して可なり、に働いてゐる處に、その独自の境地を持ち、歴史物語中の一異彩を成してゐる。

要するに、この兩書は國史の研究資料としては勿論、源氏物語

や枕草子を研究考察する上にも見遁されないものであると共に、大鏡は別に一箇の作品としても十分に面白く鑑賞されるものである。

中野正剛
衆議院議員。

七 南洲を生める環境 中野正剛

南洲 西郷隆盛の號。
文政十平鹿兒島に生れた。
明治十年西南役の時城山に自刃した。
十年戦役
明治十年の西南戦争。

私の郷里は筑前福岡であります。私の少年時代には郷黨の間に南洲翁崇拜家が随分多かつたのであります。たしか五月十日であつたかと記憶して居りますが、この日毎年十年戦役戦死者の招魂祭が行はれました。これは勿論官軍戦死者の靈を祀るのでありますから、我々はそれを官軍の招魂祭と呼びました。之に對して、民間の有志は賊軍に投じて戦死した舊士族戦死者の靈を祀る爲に、別個の招魂祭を催したものであります。官軍の招魂祭には、學校は業を休んで一同参拜しましたが、民間

傳習録

王陽明著。

洗心洞割記

大鹽平八郎著。

言志録

佐藤一齋著。

城山

鶴丸城址を云ふ

鹿兒島の西北に

在つて隆盛自刃

の場所。

岩崎谷

城山中の一凹地

を呼ぶ。隆盛據

守二十餘日、九

月廿四日を以て

陥つた。

淨光妙寺

岩崎谷の東北に

ある。城山最期

の時南洲以下の

墓所を此に相し

て以來今に至る

迄往拜の士女が

たえない。

十餘年前

大正八年頃。

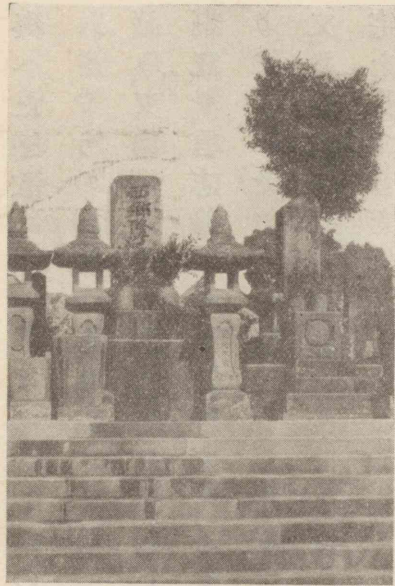
の招魂祭には、戦死者の子弟知人のみが参拜したのであります。私共少年の心は、妙に維新の英雄大西郷と共に死んだ郷黨先輩の招魂祭に引かれました。實際大西郷の無邪氣な九州少年に與へた感激は、強いものであつたのであります。

さやうの機縁から私は中學時代にも頻りに南洲翁の傳記を讀み、又南洲翁が青年時代に愛讀されたと云ふ傳習録や、洗心洞割記や、言志録やを半解のまま、心を潜めて味うて見たものであります。そこで一應鹿兒島を訪ひ、城山に登り、岩崎谷を訪ね且又、我が家の松籟塵縁を洗ふ」と南洲翁自身が歌はれた、退耕の隱宅を見て昔を偲びたいと云ふことは、私の久しい間の切なる願であつたのであります。

十餘年前始めて此の地に遊び、淨光妙寺の南洲墓下に立ち、壘壘たる若殿原の墓石の間を低徊し、錦江灣を俯瞰し、櫻島を遠望

櫻島
鹿兒島縣鹿兒島
郡にある半島。

した時の感慨は今に忘れることが出来ないであります。私は少年時代から豪快勇壯な薩摩隼人を想像して居りましたから、あの城山から四望した一帯の風景のしつとりした穩かさ



墓の盛隆郷西

意外の感を催しました。繪の如く浮び出でた櫻島、其の麓を洗ふ錦江灣の靜かな波、遙に霞む大隅の山、これらの風光は少しの覇氣もなく、何となく奥床しさと懐かしさを感じる

のみであります。

英雄の出づる所地勢よしと云ひ、人傑地靈とも云ふが如く、英傑は環境を象徴して現はるゝものとすれば、南洲翁の本質は稜

稜たる氣骨を負ふとか、豪放磊落とか云ふ、所謂東洋流の豪傑風よりは、如何にも奥深く、如何にも敦厚な、渾然たる人格であつたことが、この自然からも肯かれるのであります。當時私の接した限りでは、薩摩隼人は決して荒くれ男ではありませんで、甚だ鄭重で、甚だ謙遜で、到る所禮儀の郷に入るの感を懐かせられたのであります。然るに、旅中偶然にも一夜暴風に遇つたことがあります。太平洋の彼方から錦江灣をまくし立て、薩南一帯を荒れ狂うた風勢の物凄かつたこと、私の未だ嘗て經驗したことの無い激しさでありました。屋根は飛び、垣は倒れ、宿所附近も慘澹たる大災害を受けました。聞く所では、斯くの如き暴風は數年に一度吹くものださうで、彼の温順鄭重な薩摩人が、猛り立つた時の勢を想見せしめたのであります。

薩南の風光は穩かであります。しかも平靜の裏に活氣を藏

平野國臣
江戸時代但馬生
野から出て勤王
の兵を起した。

天吹
てんぶく。一節
切のこと。

鳥津義弘

通稱又四郎、貴
文の次子、元和
五年卒した。八
十五歳。

關ヶ原の戰

慶長年間美濃國
關ヶ原に於ける
石田三成と徳川
家康との戰。

三州

薩摩、大隅、日
向の三國。

して居ります。筑前の勤王家平野國臣は、我が胸のもゆる思に
くらぶれば、煙は淡し櫻島山」と詠じましたが、其の櫻島が大正三
年に爆破して大荒れに荒れたやうに、明治維新にも十年戦争に
も、薩南健兒は一たび手に唾して起てば、疾風迅雷の如く、他の追
隨を許さないものが有つたのであります。薩摩の自然は人に
哲學的思索と、詩的感激とを與へます。琵琶を弾じ、天吹を奏し、
詩を吟じ、柴笛を吹く薩人は、實に一面に於て天成の詩人であり
ます。南洲翁は實に彼の重厚な人格の裏に、斯くの如き熱と情
緒とを過分に有して居た一大巨人であります。
南洲翁の人格は、一面に於ては薩南の自然に陶冶せられ、又他
の一面に於ては歴史に感化せられ、境遇に鍛鍊せられたもので
あります。三百年前の藩主鳥津義弘公が、關ヶ原の戰に、戰陣を
突破して退却した猛勇は、固より三州健兒の修養に多大の感化

日薩隅

日向・薩摩・大
隅の三國。

肥薩海岸線

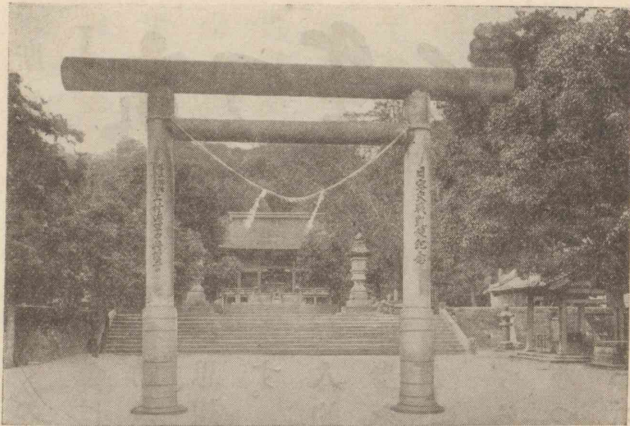
肥後薩摩の海岸
線。

楊子江

支那を流れる亞
細亞第一の大河
長江といふ。
瓊江漢江等の無
数の支流を合せ
て海に入る。

齊彬公

文化六年生。
安政五年七月薨
齡五十。
齊興公の嫡子、
勤王にして英明
治國の才があ
つた。照國大明
神としてまつら
れてゐる。



鳥津齊彬公を祀る照國神社

を與へたことと思はれますが、南洲翁が江戸城を受取つた時の
風貌が、九州征伐當時の豊臣秀吉の
應對振りに似て居るのも偶然でな
いかも知れませんが。而して日薩隅
の地は琉球との交通を便りに支那
の形勢が窺はれ、新に開通した肥薩
海岸線一帯を洗ふ浪は、支那楊子江
の水と相通じて居るのであります。
彼の幕末に際して幾多の雄藩に名
主があつた中に、薩の齊彬公が遙に
傑出して、世界の形勢に通曉されて
居たのも、所以ありと見ねばなりま
せん。而して南洲翁は實に此の名君齊彬公の拔擢を被り、其の

啓發を受けられたのであります。

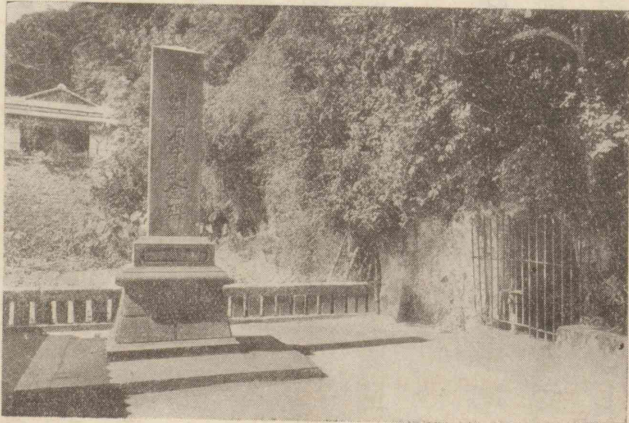
斯くの如き自然、斯くの如き歴史、斯くの如き環境より生れた南洲翁は、深沈濶大、哲人にして英雄、思想家にして行動家、而も其の行動を飛躍せしむる情熱を深い思想の源泉に汲む底の人であつたのであります。私は我が國の英雄中、思想の背景を有し、哲人的風格を有する點に於て、南洲翁は獨特の地歩を有せられ、此の意義に於て南洲翁は現代以後に益、光輝を放つべき不朽の英雄であると信ずるものであります。岩崎谷の洞窟を御覽になつた諸君は定めて御眼に止つたてでありませう。あの途に見ゆる鐵道の隧道の上に彫みつけられた南洲翁の筆蹟は實に「敬天愛人」の四字であります。これは南洲翁

筆蹟
敬天愛人
南洲書

敬天愛人

西郷隆盛筆蹟

の好んで書かれた文句であります。敬天愛人とは何と情趣ある文字ではありませんか。深き人間性の根柢を把握した者でなければ、到底こんな文句は浮んで來ないのであります。尋常一様の維新の元勳達に書かせたら、大概「忠君愛國」の四字を以てしたのであります。忠君愛國は固より神聖であります。併し忠君愛國の行動の主體は敬天愛人の精神であります。敬天愛人は此の忠君愛國よりは今一つ奥の所にあるものであります。南洲翁はそれを捉へ、それを體せんとされたのであります。



岩崎谷の洞窟

南洲翁は忠誠無類の人でありました。又愛國的情熱家でありました。併しながら、其の一身を挺して忠君愛國の大事に當るべき自己の修養は、奥深い人間の性情に尋入つて居るので、そこに敬天愛人と云ふ床しい音が出て來たのであります。孔孟の道でも、耶蘇の教でも、現代の人格教育でも、極致まで推し究め、精髓まで煎じつめると、やはり純真な人間性の涵養となり、そこに敬天愛人と云ふ第一次的の聲音が出て來ると思ひます。而して此の純な敬虔な人間性が、發して忠となり、孝となり、愛國となり、殉難の精神となると思ひます。

孝は百行の基と言ひますが、人間は生れて母の襁褓の中に長じ、母の次に父と云ふ順序に、先づ父母の恩愛を受くるものであります。是に於てか、純真な人の子の性情は、父母を對象として先づ孝となつて現れ、逐次に其の接する所の環境に伴うて兄弟

姉妹の親しみとなり、朋友の信となり、夫婦の愛となり、忠君となり、愛國となる譯で、人間純情の發露なる順序よりして、孝は百行の基なりと言つたものと思はれます。南洲先生は天成の偉材、寧ろ修養の拘束となつた封建的儒教の壘壁を蹴破つて、驀地に聖賢の心境に突入し、敬天愛人と云ふ人間性の奥底から發する純なる音じめを出しながら、獨り群雄の間に濶歩して居らるゝのは、實に痛快の至りであります。(國民に訴ふ)

八出

廬

土井晚翠

土井晚翠
名は林吉、仙臺
の人、明治四年
生、文學者、
詩人。

南陽
河南省南陽府。

嗚呼南陽の舊草廬、
夢はたいかに安かりし。
隴畝に民とまじはれば、
ただ一曲の梁父吟。

二十餘年のいにしへの
光を韜み香をかくし
王佐の才に富める身も、

梁父吟

步出齊城內、遙望三澗陰、里中
有三墳、累累正相似、聞是誰家塚、田疆古治氏、
力能拂三南山、文能絕三地理、一朝被三讒言、二桃殺三士、誰能爲三此謀、相國齊晏。

閑雲野鶴空ひろく
月を湖上に碎きては、
ゆふべ暮鐘に誘はれて、

風に嘯く身はひとり、
ゆくへなみまの舟一葉、
訪ふは山寺の松の風。

江山さむるあけぼのの、
寒梅瘦せて春はやみ、
伴は野鳥の暮の歌、
誰そや碁局の友の身は。

雪に驢を驅る道の上、
幽林蔭をうがつとき、
紫雲たなびく洞の中、

隆中
湖北省襄陽縣の西。

その隆中の別天地、
大盜さほひはびこりて、
風の枯葉を掃ふごと、

空のあなたを眺むれば、
荒びて榮華さながらに、
治亂興亡おもほへば、

世は一局の碁なりけり。

その世を治め世を救ふ、

臥龍の名
「徐庶見三先主、先主器之、謂三先願二曰、諸葛孔明臥龍也、將軍豈願レ見之乎。」



孔明

君
劉備のこと。

高眠遂に永からず、
君が三たびの音づれを、
羽扇綸巾風かろき、
草廬あしたの主や誰。

信義四海に溢れたる、
背きはてめや知己の恩、
姿は變へて立ちいづる、

經綸胸にあふるれど、
名利を俗に求めねば、
岡も臥龍の名を負ひつ、
亂れし世にも花は咲き、
花また散りて春秋の、
うつりはここに二十七。

古琴の友よ、さらばいざ、
残月の影よ、さらばいざ、
蒼猿ねむれ谷の橋、
草廬あしたは主もなし。

あかつきさむる西窓の、
白鶴かへれ嶺の松、
岡も更へよや臥龍の名、

成算むねに藏りて、

乾坤ここに一局碁

ただ掌上に指すがごと、

三分の計はや成れば、

見よ、九天の雲は垂れ、

四海の水は皆立ちて、

蛟龍飛びぬ淵の外。

(天地有情)

九 日本人の性質及び理想

金子堅太郎

三月十日の奉天戦争は如何なる衝動を亞米利加人に與へた

金子堅太郎
福岡縣の人、樞
密顧問官。子爵

奉天の戦
日露役に於ける
奉天大會戰。明
治三十八年三月
鴨綠江
支那朝鮮の國境
を流る。下流に
安東縣新義州等
の市邑がある。

か。我が軍は鴨綠江を渡つて以來、連戦連勝、遂に奉天を占領した。奉天の戦は、日露兩軍の兵數、砲數の上から見ても、世界未曾有の大戦であつた、そして又未曾有の大勝利でもあつた。故に、亞米利加人に強い感動を惹起した。何が故に日本兵は斯う強いのか、かかる忠勇な兵隊は如何なる訓練によつて出來たかと云ふ事に就いて、陸海軍人は勿論、學者、政治家、教育家、實業家、其他の人々も考へ始めた。此等の人々が私を俱樂部や協會に招いて、吾々は今迄日本は此の如く勇武な國とは思つて居なかつた。日本の軍人教育に就いて聞かせてくれと求めた。それで一通り日本の歴史に就いて述べた。すると、次第に興味を持つて來て、とう／＼是非亞米利加國民全體に聞かせたいから、公開演説をして貰ひたいと言ひ出した。私は此の際亞米利加人の同情を得たいと思ふ一念から何所にでも出かけて行つて、喜んで演

説をした。紐育の政治論理學協會の案内で四月二日カーネギ
ホールで公開演説をした。其の時の演題は彼等の求めに應
じて日本人の性質及び理想にした。約束の時間に往つて見る
と、六千人ばかりの聴衆が来て居た。私は演説の冒頭に於て先
づ話の骨子は、

「抑、日本文明の原則は正義である。正義を遵奉すると云ふの
が原則である。之に反して、歐米文明の精神は、勢力を得ると云
ふことである。その間に殆ど霄壤の差がある。」
と喝破して置いて演説を續けた。

「故に生存競争の舞臺に於て、若し東西の兩國が衝突する時に
は、今日迄の實例に徴すると、正義は常に勢力に壓迫せられ、道徳
上の識見は常に物質的の腕力に壓倒されると云ふ結果を齎し
たのである。現に支那は阿片戦争に於て英吉利に負けたが、こ

阿片戦争

清朝宣宗の時、
印度より阿片の
輸入を禁じたた
め英支間に起つ
た戦争。英軍南
京に迫りした
め、宣宗已むな
く香港を割譲し
て和を成した。
南京條約が是で
ある。

香港

支那廣東灣口の
小島上にある。
九龍と對して良
港を抱く。一八
四二年以來英領
となる。東洋一
の貿易港。

の戦は英吉利商人が阿片を支那に賣込むこと、自己の利益の爲
に支那人の體質を軟弱にし、病氣にするやうな、人道に背く商賣
をし、それに支那が反對したが爲に起つたもので、結果は支那は
香港を取られてしまつた。畢竟正義が腕力に壓迫されたので
ある。

我が國に於ても明治二十七八年の戦争で、我が軍が支那軍に
勝つて遼東を占領した。所が露獨佛の三國が干涉し壓迫して、
正當な戦果として得た遼東を支那に還付させた。當時我が陸
海軍は戦後の疲弊から回復してゐなかつた爲、已むを得ず涙を
飲んで之に従つたのである。

日本文明の原則は、常に正義を本として居るから、無道の腕力
は揮はぬ。日本は數千年前支那から儒教を入れ、印度から佛教
を入れてこれを同化させ、茲に文明の基礎を築き上げた。かう

いふ精神的訓練に由つて、正義、人道の精神を十分に解してゐる。所が交通の關係上歐米人に接することがおそく且稀であつたから、歐米の學術、技藝、機械等には一籌を輸してゐた。それで明治維新以來、古來の正義公道を道義の根本とし、之に加ふるに歐米の物質文明を以てして、彼等に對抗して行く外はないと決心したのである。仍て殖産工業を盛んにし、陸海軍を擴張し、又歐羅巴の政治的施設を立ちどころに實行した。故に日本今日の國民教育の方針は、自負すること勿れ、弱者を虐ぐることを勿れ、常に自ら慎みて放埒な舉動をすること勿れ、他に對しては丁寧懇切にして、決して粗暴な振舞をする勿れ等である。明治二十三年に明治天皇の賜はつた教育勅語は、我が國肇國の精神を基礎とし、之に歐米の學術を加へて、新に國民の向ふべき所を示されたものである。」

と述べて、教育勅語の英譯を讀上げた。

「此の教育勅語は國民教育の原則である。併し、陸海軍に對してはなほ『軍人讀法』と稱する天皇陛下の勅諭がある。是は明治十五年に明治天皇が陸海軍の軍人に特に御下しになつたものである。」

と言つて、軍人讀法の英譯を讀上げた。

次に日本人の理想は如何と云ふことに説き及ぼした。

「日本人は豫てから歐米文明を輸入して、國家の進歩を圖ると云ふ方針で、舉國一致の努力をして居る。明治の初年五箇條の御誓文の一に、

「廣ク智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ」

とある。智識を世界に求めて、日本の皇基を振起させると云ふのが、今日の日本國民の理想である。抑、日露戦争の日本人の頭

に於ける印象は、如何程正義を主張しても、腕力が乏しければ之を貫徹することは出来ぬと云ふことである。國家は軍備が充實してなければ、外交の折衝のみでは、その正しい主張を實現することは出来ないと言ふことである。翻つて日露戦争の歐米人に於ける印象を考へて見よう。歐米人は自分等だけを文明の民と稱してゐた。そして亞細亞・亞弗利加の未開人を救ふのが歐米人の天職であるといつてゐた。それで彼等の往く所、他民族の國はどこでも占領しても宜い。未開人を文明に導く爲には、彼等を虐げても構はないと云ふのであつた。所が、是迄彼等が未開國と侮つてゐた亞細亞の一隅に日本といふ國が、露西亞を一撃の下に叩き付けたのを見せられた。そして日本と云ふ國は恐るべき國だ。吾々が亞細亞を救ふを天職と思つて居つたのは間違ひであつたと考へて來た。是が今度の戦の歐米

人に於ける印象であらねばならない。

此の戦争の亞細亞に於ける我が同種族の人民に、如何なる影響を及ぼしたかと言へば、是迄は歐米人のことであれば、如何なる無理、悪虐の行爲にも服従して居つたが、今度日本國が蹶起して、あの露西亞の悪虐無道を懲らしたのを見て、彼等も日本の先轍に倣つて、歐米文明を扶植し機械を輸入して發憤すれば、將來國家民族の獨立を回復することが出来るであらうと云ふ希望を懐くやうになつた。

かく今度の戦の影響は、第一日本國民に與へたもの、第二歐米人に與へたもの、第三他の亞細亞人に與へたもの、三つがある。日本國民は戦勝に由つて自覺を得たが、決して歐米人・歐米文明を蔑視するやうな傲慢な心は持たぬ。日本人の將來に對する希望は、東洋文明の特性と西洋文明の特性とを融和せしめ、打つ

て一丸と成して、ここに一つの新文明を造り、世界の人民をして其の恩澤に浴せしめ、全世界の平和を維持して、世界皆同胞と云ふ東西聖教の本旨を實現させると云ふにある。と斯う演説した。是は歐米人から見れば、日本人の己惚れと見え、たかも知れぬが、私は大膽に所信を披瀝したのであつた。所が翌日の新聞は、稱讚するものもあり、攻撃する者もあつたが、少くとも我々日本人の性質及び理想に就いて、理解を持つことには、相應の裨益があつたと信ずる。

(日露戦役秘録に據る)

10 寂光院

法皇
後白河法皇のこと。
文治
後鳥羽天皇即位の年。
建禮門院

法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御すまひ御覽ぜまほしうは思し召されけれども、衣更着彌生のほどは嵐烈しう餘寒もいまだ盡きせず。嶺の白雪消えやらで、谷のつら

平清盛の女徳子、人皇八十八代高倉天皇の中宮で安徳天皇の御母君。
大原
京都府愛宕郡大原村。

らもうち解けず。かくて春過ぎ夏來つて北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には徳大寺花山院土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面

北祭
賀茂の祭。四月中の酉の日に行はれる。
徳大寺
藤原實定。
花山院
藤原兼雅。
土御門
源道親。



建少々候ひけり。遠山に懸る白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまる。頃、は卯月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが末を分入らせ給ふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたるほどにも思し召し知られて、あはれなり。西の山の麓に一字の御堂あり。即ち寂光院これなり。古う造りなせる泉水、木立、由ある様の所なり。蔓破れては霧

寂光院
京都府愛宕郡大原村。

青葉まじり

高山の青葉まじりの遅櫻、初花よりもめづらしきかな（金葉集 藤原盛房）

不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燈を掲ぐとは、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山杜鵑の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを窺覽あつて、かくぞあそばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて、

なみの花こそさかりなりけれ。

ふりにける。岩の絶間より落ちくる水の音さへ古びて、よしある所なり。緑蘿の垣、翠苔の山、繪にかくとも筆も及び難し。

さて女院の御庵室を窺覽あるに、軒には蔦薺はひかゝり、しのぶまじりの忘草、瓢箪屢、空し、草顔淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕すともいひつべし。杉のふき目もまばらにて、

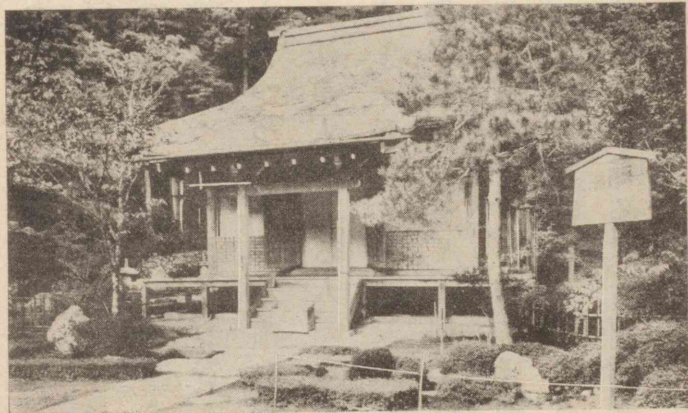
瓢箪屢、空し
瓢箪屢空、草滋
顔淵之巷、藜藿
深鎖、雨濕、原憲
之樞、和漢朗詠
集、橘直幹

時雨も霜もおく露も、洩る月影にあらそひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山前は野邊、いざさを笹に風さわぎ、世にたたぬ身のならひとて、うきふししげき竹柱、都の方の音づれば、間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとは、峰に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これ等が音づれなつては、まさ木のかづら青つづら、くる人稀なる所なり。

法皇、人やある、人やあると召されけれども、御應へ申すものもなし。稍あつて老衰へたる尼一人参りたり。女院はいづくへ御幸なりぬるぞと仰せければ、この上の山へ花摘みに入らせ給ひて候と申す。さこそ世を厭ふ御習とはいひながら、さやうのこと仕へ奉る人もなきにや、御痛はしうこそと仰せければ、この尼申しけるは、五戒十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かかる御目を御覽ぜられ候ふにこそ。捨身の行になじかは御

信西

藤原通憲のこ
と。鳥羽・崇徳・
近衛・後白河四
朝に歴任し、平
治の亂のはじめ
殺された。
紀伊二位
藤原信西の妻朝
子。紀伊守範元
の女。



寂光院本堂

にて候ふなり。

母は紀伊二位。

さしも御いとほしみ深うこそ

身を惜しませ給ひ候ふべき」とぞ申しける。この尼の有様を御覽ずれば、身には絹布の分ちも見えぬ物を結ひ集めてぞ着たりける。あの有様にて、かやうのこと申す不思議さよと思し召して、抑、汝はいかなるものぞ」と仰せければ、この尼さめざめと泣いて、しばしは御返事にも及ばず。

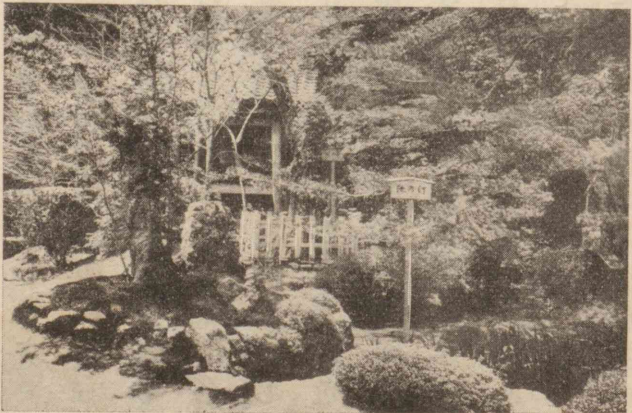
稍あつて涙をおさへて、申すにつけて、憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申すもの

候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。とて、袖を顔に押當てて忍びあへぬ様、目も當てられず。法皇、げにも

汝は阿波の内侍にこそあなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、ただ夢とのみこそ思し召せ。とて、御涙せきあへさせ給はず。

供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、各感じあはれける。さてかなたこなたを觀覽あるに、

庭の千草露繁く、籬に倒れ掛りつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立



寂光院江の櫻

普賢

普賢菩薩

善導和尚

唐の高僧。

八軸の妙文

法華經。

九帖の御書

善導和尚の觀無

量壽經の疏を云

ふ。

淨名居士

維摩詰のこと。

釋迦と同時代の

人。

定基法師

入唐し、圓通大

師といつた。

清涼山

唐の清涼山の竹

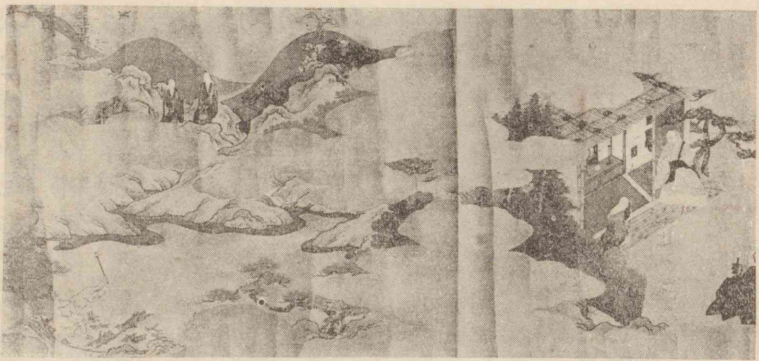
林寺。

つ隙も見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引明けて觀覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を掛けられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚並びに先帝の御影を掛け、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の薰に引代へて、香の烟ぞ立昇る。かの淨名居士の方丈の室の内に、三萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。障子には諸經の要文ども色紙に書いて、所々におされたり。その中に大江の定基法師が、清涼山にして詠じたりけん、笙歌遙に聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前。とも書かれたり。少し引きのけて、女院の御歌と思しくて、

思ひきや深山の奥にすまひして

くもるの月をよそに見んとは。

さて傍を觀覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に麻の御衣、



大原御幸繪卷

紙の御衾など掛けられたり。さしも本朝漢土の妙なる類數をつくし、綾羅錦繡の装もさながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の人々もまのあたり見奉りしことども、今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。稍あつて上の山より濃き墨染の衣着たる尼二人、岩のかけちを傳ひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇あれはいかなるものぞと仰せければ、老尼涙をおさへて、花筐臂にかけ、岩躑躅取具して持たせ給ひて候ふは、女院にてこそわたらせ給ひさふらふなれ。つま木に蕨折添

大納言典侍局
平重衡の妻。

へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實の女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言の典侍の局とまうしもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞ濡されける。女院は世を厭ふ御習とはいひながら、今かかるありさまを見えまゐらせんずらん耻づかしさよ。消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。宵々毎の闕伽の水、掬ふ袂もしをるゝに、曉おきの袖の上、山路の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へもかへらせ給はず、また御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましゝたるところに、内侍の尼参りつ、花筐をば賜はりけり。「世を厭ふ御ならひ、何か苦しう候ふべき。早々御見参あつて、還御なし参らせ候へ」と申しければ、女院御涙をおさへて、御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待

ちつるに、思の外の御幸かなとて、御見参ありけり。(平家物語)

一一 平家雜感

高山林次郎

高山林次郎
樗牛と號す。文學博士。評論家。羽前鶴岡に生れた。明治三十五年歿。享年三十二。

木曾の五萬騎
木曾義仲の軍勢

みよし野の山
三吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ。(古今集讀人不知)

六波羅・池殿・

凡そ世に傳へ遺されし歴史は多かれど、平家の都落ばかり、哀れにもまた目覺しきはなかるべし。

南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬨なほ響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち滿ちぬ。宇治淀の備脆くも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。あはれ、一門天下に身を置くに所なし。世はかく憂きを、み吉野の山のあなたに隱家はなきか。いざさらば已みなしん。都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死も知らぬ別路に、人の哀れの限りもなう、また歸り來べき都としも思はねばにや、六波羅池殿、西八條以下一門譜第の邸宅、宿房

西八條
何れも平清盛の館。

椒房
皇后の御所。

保元
保元の亂。

故郷を

故郷を焼野が原
とかへり見て未
も煙の波路をば
行く。

(平家物語、平
經盛の歌)

京白川の四五萬家をあはせて、一炬の煙となしはてぬるこそ、あ
わただしかりしか。

ここに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜に悲しむ。保元この
方、天下の榮華をつくしたる花の都の故郷を、焼野の原と顧みて、



高山樗牛

末は煙の波路をば、行方も知らずさ
すらふらん。直衣束帶の身にも、今
は黒金の衣を着けたれども、誰かは
詠歎の餘哀になれて、弓矢の譽を勵
むべき。さても棄て難き命や。今
こそはうき世なれ。さすがにしの
ばる、昔のさまの夢に入るをばいかにせん。翠華搖々として
西に向へば、秋風到る所の野に満てり。嗚呼、きのふは東關のも
とに轡を並べて十萬餘騎、けふは西海の波に纜を解きて七千餘

人。行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄す
る波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月
の出づる山の端を、あなた空とや思しけん、日暮、舳に笛吹く人
あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳を欽つ。嗚呼、こ
の時この人、想果して如何。

世にも哀れなるは平家とぞいふめる。げにこの一門の盛衰
を考ふるに、心も詞も及び難きなり。

案ずれば、一旦の榮華に耽りて、百年の計を思はず、今や秋の嵐
の吹き荒ばんずる旦も、春の夜の夢なほ臚にして、覺めての後、は
さすがにうき世と觀ずれども、先世後代すでに梭をかへたるを
いかにすべき。今を昔に反さんすべもかた糸の、よりくづれた
る世こそ、返す返すも是非なけれ。

されば風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懐を終へ、恩

遺詠

不忠度のこと。
さざ波や志賀の
都は荒れにしを
昔ながらの山櫻
かな(千載集讀
人不し知)

恩愛
平維盛のこと。

入道相國
平清盛。

昔は殿上の交云
平忠盛が殿上人
から爪はぢきさ
れた昔のこと。



平家の都落 (春日権現記に據る)

愛にほだされては、三身の現在に來世の果報を思はず。哀は桐の一葉に散り初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば怪しきまでに哀れなりける運命かな。
さるにても入道相國の生涯こそ、なかくおもしろかりけれ。弓矢のいさをしはや畢んぬ。朝家の權柄今はた盛んなり。一門殿上に昇りて六十餘人、私封全國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗者皆ここに集まれり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今はこの人ならては人にあらじ。と唱へられ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏これが爲に目を敬つるばかりなり。

十善
不殺生
不偷盜
不邪淫
不妄語
不惡口
不兩舌
不綺語
不貪慾
不瞋恚
不邪見
と書かれしも
平家物語を指す。
帝座動きて
治承四年福原遷
都を云ふ。
愛宕の里
百年を四かへり
までにすぎ來に
し愛宕の里の荒
れやはてなん。
當時の落首(平
家物語)
維盛
清盛の嫡孫、重
盛の長子。

されば十善の帝王畏くも外戚の威におされ給ひて、八幡賀茂の御幸は、八重の潮路の嚴島とぞ觸れられける。なにがしの卿が入る日をも招きかへさんずる勢と書かれしも、げにことわりとぞ覺ゆる。
不敵なる入道は、私門の榮に飽きたらで、世に人もなげにふるまはれけるこそゆゑしけれ。ここに卿相雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代の帝座俄に動きて愛宕の里の哀れをとどめけるこそ、なかくにあさましかりしか。
咲きも残らず散りも始めぬ櫻花、嵐なくともかくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萌黄匂の鎧着て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀、帯佩こそ、あつばれ平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の

富士川
富士川に對陣し
た時水禽の音を
源氏の軍と誤
つて、退却した
こと。

木曾の山氣
木曾義仲のこと
兩山
比叡山延曆寺と
奈良興福寺。

小松の内府
重盛のこと。

水禽に算を亂しし十萬餘騎は、徒に永き世の笑をとどめたるに過ぎず。加ふるに北土俄に雲亂れて、木曾の山氣漸く都に逼り、兩山の衆徒またすでに反覆の色を示しぬ。平家の運命日に益、急なり。

時しも入道は病に罹りぬ。あはれ病の床の寂しきに、霜夜の鐘の響の闇の底に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、三十餘年の過去を靜かに憶ひ出でたる時、而して命の際の身ぞと觀じたる時、彼果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身に餘りて、保元のいさをまたいふに足らずと思はざりしか。己につらかりし人々を、かくまでに惱まししことの罪深かりきとは思はざりしか。幾たびか帝座を驚かし奉りしは、は軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせしことの中にも、非道の所行なりしを思はざりしか。更に小松の内府が、身命にかへて乃

父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたゝ悔恨の心を動かすことなかりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を棄てて、未來の淨樂を欣求する一念を發することなかりしか。皆あらず。入道は死に至るまでその初念を翻すことなく、正に生けるが如くにして死せしなり。

今はの詞にいはいはく、兵衛佐頼朝が首を見ざりつること、返す返すも遺憾なれ。我死したりとて佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。急ぎ討手を下し、彼が首を刎ねて我が墓前に懸けよ。これぞ我に對しての今生後世の孝養にてはあらんず。と。一念の執着に必衰の運命をもともせず、三世の因果を身にひくとも、なほ怨敵に報いんことを必せり。その事の可否はしばらく措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の強さは感ずべ

きなり。たとひ四海の波を翻して彼が頭にそぐともなほこの一我をいかにもすること能はざらん。六尺の眇軀ここに至れば天地の大にも比ぶべく、運命我に於て浮塵に等しからん。所謂死して而して生けるものといふべきか。
(擣牛全集)

二三 東 下り

むかし男ありけり。その男身をえうなきものに思ひなして、京にはあらし、東の方に住むべき國求めむとて行きけり。信濃國、淺間の嶽に、烟のたつを見て、

信濃なる淺間の嶽に立つ烟、

をち方人の見やはとがめぬ。

もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ處にいたりぬ。そこを

八橋
愛知縣碧海郡。

八橋といひけるは、水ゆく川の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋とはいひける。その澤の邊の木の蔭におり

居て、餉くひけり。その澤に燕子花いとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅のこゝろをよめ、
といひければよめる、

から衣きつゝなれにし

つましあれば、

はるばる來ぬる

たびをしぞ思ふ。

とよめりければ、みな人餉の上に涙落して、ほとびにけり。



(語物勢伊入繪) たばつきか

宇津山
静岡市の西。

ゆきく〜て駿河國にいたりぬ。宇津山にいたりて、わが入らむとする道はいとくらうほそきに、鳶かづらはえしげり、物心ほそく、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道にはいかでかいます」といふを見れば、見し人なりけり。京にその人のもとにとて文書きてつく。

駿河なるうつ山の山邊のうつゝにも、

夢にも、人のあはぬなりけり。

富士の山を見れば、五月のつごもりに雪いと白う降り。

時しらぬ山はふじの嶺、いつとてか、

かのこまだらに雪の降るらむ。

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、形は鹽尻のやうになむありける。

なほゆきく〜て、武藏の國と下總との中に、いと大きな川あ

り、それを隅田川といふ。その川の邊に群れ居て思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に乗



(語物勢伊入繪) 川 田 隅

れ、日も暮れぬといふに、乗りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも白き鳥の嘴と足と赤き、鳴の大ききなる水の上に遊びつゝ、魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見しらず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、
名にし負はばいざこととはむみやこ鳥、
わがおもふ人はありやなしやと。

伊勢物語
在原業平の歌を
中心とする。平
安朝時代の歌物
語。

とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。 (伊勢物語)

五十嵐力

明治七年山形縣に生る。文學博士。早大教授。國文學者。

一三 古文學の興味 五十嵐 力

古文學といへばつい子供の時代が聯想される。子供の言葉は、其の思想のやうに單純で、格別な意味も理窟も結構も修飾も無い。けれども、其の眞率で、無邪氣で、作らず飾らぬ所に、一種の言ひ難い簡樸・自然の妙味がある。古文學もこれと同じく、其の興味的一面は自然・簡樸といふ點にある。

幼時の回想は人生の最も楽しいものの一つである。嘗に嬉しい懐かしい事の回想が人を恍惚たらしめるのみならず、悲哀・苦痛・煩悶等の苦々しい經驗でも、幼時の回想となると、一種の燦爛たる後光を射して現れる。唐虞三代の大昔が黄金時代として憧憬されるのも、人の心に此の傾向があるためであらう。古

唐虞

支那聖天子堯舜の時代。

三代

夏・殷・周のこと

文學もこれと同じく、その興味的一面は回顧の楽しさにある。

三つ兒の魂百までもいふ。成人の性行・閱歷を取つて其の幼時に對照すると、幼時の頑是ない言行がよく後日を暗示して居るやうに見え、幼時に存在した種子が、時を経て花を開き實を結んだに過ぎぬやうにも思はれる。國にしても其の通りで、一國民が文學史上、又一般歷史上、幾百年幾千年の間に發達を遂げた事が、幼稚なる形で既に古文學の中に現れて居るやうに見える。而して發達した文化の源流なる種子的要素を、古文學の中に發見するのは、一種の楽しみであり又勵みである。古文學の興味は一面此の源流發見といふ點にある。

尙他に擧ぐべき興味は「さび」・含蓄的妙味等であらう。物が舊くなれば、物自體は其のまゝでも、年處を經過したといふ事が一種の趣致・品格を加へるやうになる。これを「さび」といひ、時代と

いひ、或は骨董趣味といふ。老人の白髪の品位、燈籠巖石の苔、陶器、漆器、古文書に見る煤色の風韻などがそれである。古文學も其の通りで、その興味の一面は此の「さび」又は「時代」といふものにある。

古い時代の言語には含蓄的の床しさがあつた。後代には幾十萬といふ夥しい語を用ゐて表はす事をば、大昔は極めて乏しい語で漠然と言ひ表した。畢竟、言語の發達の幼稚なものはあるが、文學の眼で見ると、その朦朧茫漠たる所に想像の餘地があり、含蓄の妙味がある。古文學の興味の一面は此の含蓄的といふ點にある。

自然簡樸、回顧源流、發見さび、含蓄、是等は古文學の興味の主なるものであらうと思ふ。
(新國文學史)

藤井紫影

名は乙男、兵庫縣の人、明治元年生。

京都帝國大學名譽教授、文學博士。

元和偃武

元和元年五月大坂夏の陣により、秀頼母子自殺して豊臣氏滅亡に及び天下全く統一したこと

一四 元祿の三文豪

藤井紫影

江戸時代に於ける文化の興隆を説く者、先づ指を元祿に屈す。實にや、元和偃武よりこゝに七十年、世は兵革の響を忘れて、漸く泰平の光に浴し、草創蕪雜の機運は正に轉回して、整理修飾の時代となり、數十年間、人々の胸奥に蟄伏鬱積したりし精神的需要は、種々の形態を取りて、今や、春風膏雨の時を得、争うて蓄を破り、千紫萬紅目もあやに咲きいでぬ。

元祿は、文藝復興の時代にして、またその發生の紀元たり。かくて、その新に起れるものは勿論、再び興りしものも、皆清新の風に富み生氣潑刺たり。元祿文藝の貴ぶべきは、即ちこの點にあり。時世の要求は文學技藝に、この約束を奉ずべく、諸道の豪傑を指麾驅使したるものの如し。

下河邊長流 契沖の友、國學者。

契沖阿闍梨 元祿十四年歿。萬葉集代匠記を書く。

戸田茂睡 歌學者。江戸の人。

伊藤仁齋父子 仁齋と東涯のこゝと、共に儒學者。荻生徂徠

儒學者。復古學をとなへた。

菱川師宣 畫家、安房の人。英一蝶

大阪に生る。畫家。享保九年歿。尾形光琳

畫家。麗美なる光琳時繪を製す。井原西鶴

元祿著名の小説家、俳人寛永十九年大阪に生れ

元祿六年八月歿す、五十二歳。松尾芭蕉

正保元年伊賀に生れた、大俳人元祿七年京阪に

旅して十月歿。近松門左衛門

享保九年十一月七十二で歿、淨琉璃の作者。

竹本義太夫 井上播磨の孫弟子、義太夫節を完成した人、攝津の人、正徳四年歿。年六十四。

出世景清 近松の淨琉璃、時代物としての代表作。



井原西鶴

國學の下河邊長流契沖阿闍梨戸田茂睡、儒學の伊藤仁齋父子荻生徂徠、繪畫の菱川師宣、英一蝶、尾形光琳など、孰れも皆この特色を發揮したる大家、鉅匠ならざるなし。

この時に方

維波俳林

松尾芭蕉

西鶴

浮世の月

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

元祿六年八月十日又十二日

井原西鶴筆蹟

の社會を相手とする俗文壇に三偉人を出せり。三偉人とは誰ぞや。浮世草紙の井原西鶴、俳諧の松尾芭蕉、淨瑠璃本の近松門左衛門是なり。この三人、時を同じうして、各特殊の方面に旗幟を翻し、名聲噴々として天下を風靡

せり。西鶴が浮世草紙に得意の諸作を出しし貞享三年は、芭蕉が貞門談林の舊寶に安んぜずして、古池の一句に正法眼を開き、近松が竹本義太夫の爲に始めて出世、景清を作りし時なり。この時、西鶴四十五、芭蕉四十三、近松三十四、年齢事業、兩つながら西鶴を以て先輩とすべ

近松門左衛門



きも、爾來、彼の筆を武家物町人物に轉じたるより觀れば、この三人が、期せずして轉化の時期を同じくせるも奇なりといふべし。蕉風俳諧の趣味は幽寂、閒適を旨とす。

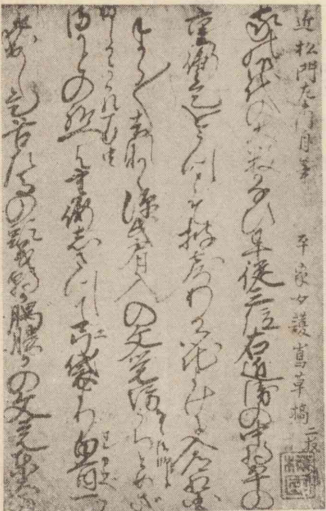
浮世の利慾に眼を光らし、俗界の歡樂に足を空なる京阪の町人、いかでかこれに満足すべき。芭蕉が江戸を中心として、風化を四方に及ぼしたるも、その門徒は、多く士林桑門の騷客より成れり。されば、彼をして、蕎麥と俳諧とは上方

談林風
白徳の俳諧に對し自由な破格な態度をとつた俳諧。

筆蹟

家の御代の大數かなひ畢從三位右近衛の中將平の重衡是をうつとそ披露ある心地よげに入道相國手から去ながら源氏肩入の文覺坊うちとめざるかとの給へは重衡しさつて弓袋より白骨一つ取出し是は左馬の頭義朝が獨體かの文覺東大寺

の風土に適せずと放言せしめたるも、亦故なきに非ず。談林風は諧謔を旨とし、新奇を競ひ、俗耳を喜ばしむること、遂に蕉風の上にあり。京阪は西山宗因起りてより、久しくその根據地たりしも、流行時移りて、漸く世人の厭倦を招けり。西鶴談林の驍將を以て、浪華の重鎮たり。好んで人事を詠じ、小説的著想の佳句、往々誦すべきものあれども、西鶴の西鶴たる本領は浮世草紙にあり。近松も亦俳諧を西鶴に問ふと稱せらる。されどその句殆ど傳はらず。この二人は、固より芭蕉と俳諧を比すべきに非ず。唯、二人者の著作中、その趣味文法に於て、多少俳諧の影響あるを注目すべしと爲す。西鶴、宇治加賀椽のために「曆の



近松門左衛門筆蹟

作あれど、淨瑠璃に於て、近松の敵に非ざるや言ふを俟たず。この三子者、各、獨特の長技を揮うて、ここに絢爛たる元祿文藝の花は、東西の野に咲きみちぬ。芭蕉の清淡、西鶴の放縱、近松の溫雅、その人となりを異にするに隨うて、文もまた高雅、輕雋、秀潤の差あれども、俱に一代の粹たるを失はず。元祿の文壇、國學に、儒學に、豪傑の士乏しからざりしも、この三人微りせば、その落莫想ひ見るべきなり。(近松門左衛門)

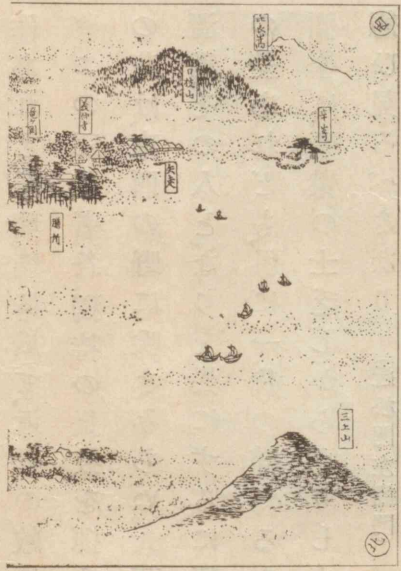
一五 幻住庵の記

石山の奥、岩間のうしろに山あり。國分山と云ふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ること三曲、二百歩にして八幡宮たたせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや、唯一の家には甚だ忌むなる事を、兩部光をやはらげ、

利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いとど神さび物しづかなる傍に、住捨てし草の戸あり。蓬根、簞、軒を圍み、屋根漏り、壁落ちて、狐狸臥處を得たり。幻住庵といふ。

あるじの僧何某は、勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になむ侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ残せり。

余また市中を去る事十年ばかりにして、五十年や、近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面を焦し、高すなご歩みくるしき北海の荒磯に踵を破りて、今歳



幻住庵附

何某
勝所藩士本多八左衛門。
菅沼氏
一に曲水とも云ふ。近江勝所の藩主本多氏に仕へ、享保五年七月、同僧曾我權太夫の奸を憎み、刺殺して刃に伏す。



近の古の圖

湖水の波に漂ふ。にほの浮巢の流れとどまるべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月のはじめ、いとかりそめに入りし山のやがて出てじとさ

へ思ひそみぬ。

さすが春の名残も遠からず、躑躅さき残り、山藤松にかゝつて、時鳥しばく、過ぐるほど、宿かし鳥のたよりさへあるを、啄木鳥のつゝくとも厭はじなど、そぞろに興じて、魂は吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は宋中にそばだち、人家よきほどに隔たり、南薰峯よりおろし、北風海に浸して涼し。日枝の山、比良

やがて出でじ

よしの山やがていでじとおもふ身を花散りなばと人やまつらむ

(西行法師)

魂は

昔聞洞庭水、今上岳陽樓。吳楚東南折、乾坤日夜浮。

(杜甫)

瀟湘洞庭に立つ
惠宗烟雨歸雁、坐我瀟湘洞庭、欲喚扁舟歸去、故人道是丹青。

(山谷集)

三上山 滋賀縣野洲郡。

田上山 富士山の別名。

無名抄に山麓に猿丸大夫の墓があると書いてある。

海棠に 徐老海棠集上王翁主簿峯庵。

とくくとくくと 落つる岩間の苔清水

汲みほすほどみなきまずひかな(西行の歌といふ)

の高嶺より、唐崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂る、舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞の叩く音、美景物として足らずといふ事なし。中にも三上山は土峯のおもかげに通ひて、武藏野の古きすみかも思ひ出でられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽千丈が峯袴腰といふ山あり。黒津の里はいと黒う茂りて、網代守るととて詠みけむ歌の姿なりけり。なほ眺望くまなからむと、後の峯に這ひのほり、松の棚作り、藁の圓座を敷きて、猿の腰掛と名づく。かの海棠に巢をいとたび、主簿峯に庵を結べる王翁徐佺が徒にはあらず。ただ睡癖山民となつて、辱顔に足をなげいだし、空山に虱を捫つて坐す。たまたま心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくくとくくとく、一爐のそなへいと輕し。はた昔住みけむ人の、殊に

筑紫高良山 福岡縣三井郡に高良明神がある。今國幣中社。甲斐某 藤木甲斐守。寛永時代の人、能書家。



幻住庵

心高く住みなし侍りて、巧み置ける物ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜の物をさむべきところなど、いさゝかしつらへり。さるを、筑紫高良山の僧正は、賀茂の甲斐何某が嚴子にて、このたび洛に上りいませかりける。を、或人をして額を乞ふ。いとやすく、と筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。やがて草庵のかたみとなしぬ。しすべて、山居といひ、旅寝といひ、さるうつは蓄ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれく、訪らふ人に心を動かし、あるは、宮守の翁、里のを

樂天
白樂天。
支那唐代の詩人
白居易のこと
詩集白氏文集

老杜
支那唐代の詩人
杜甫のこと
李白と並び稱せられる。

のこども来りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑に通ふなど、わが聞きしらぬ農談。日既に山の端にかゝれば、夜座しづかに月を待ちては影を伴ひ、燈を取りては、罔兩に是非をこらす。かく言へばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隠さむとはあらずや、病身人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。つらく年月の移りこし拙き身の科を思ふに、一たびは仕官懸命の地を羨み、ある時は佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯のはかりごととさへなれば、終に無能無才にしてこの一筋につながる。樂天は五臓の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻のすみかならずやと思ひ捨てて臥しぬ。

先づたのむ椎の木もあり夏木立

(猿蓑集)

一六 芭蕉の生活

藤村 作

室町時代
延元三年足利氏
幕府を開きてよ
り二百三十六年
の間を云ふ。

貞門
古風の俳諧を唱
へた松永貞徳の
一門を指してい
ふ。

俳諧は室町時代からあつたものであるが、其の時代の俳諧は滑稽遊戯の文學であつた。寂の文學としての俳諧は、元祿時代の松尾芭蕉から始まると言つてよい。尤も寂の由来を求めれば、源泉は遠い。其の遠い源泉から絶えぬ流が續いてゐるので、必ずしも芭蕉に始まつたものではない。俳諧生活の特質としての寂を考へるには、芭蕉から澤山である。寂の特性を知るには、芭蕉の俳諧の特質を調べなければならぬ。之を知るには芭蕉の生活を調べて見なければならぬと思ふ。

一言にして評すれば、芭蕉は人格的な詩人である。初期貞門の俳諧を學んで居た時は、低級な遊戯的の俳諧家であつたが、それから晩年の大成期に至る迄に、彼の藝術は數度變化してゐる。

變化に富んだ彼の一生涯に、彼の人格は磨かれて次第に偉大をなしたものである。彼の生涯が、人格の大成、生活の眞意義をもとめて怠らなかつた生涯である如く、彼の一代の藝術にも努力の跡を留めて、一步々々高く大きくなつてゐる。學問や禪の修養といふものが、彼の人格と俳諧とを大成する助となつたことは固より疑もないが彼の日常の生活そのものは、亦それ以上に與つて力あるものであつた。彼の藝術には、常に彼の人格の光が射し、努力の痕が見えて居る。そこに、普通の俳人の作品に較べて、遙に侵し難い權威がある。彼は晩年自分の生活を顧みて、「無能無才にして此の一筋に繋がる」と言つてゐる。この一筋といふのは俳諧である、藝術である。この意は、唯生活の方便として、已むを得ず俳諧の藝術に携はるといふ淺薄のものでないこと、彼自身の生活と藝術との間に、もつと密接の關係を保つこと

を言つたのである。一言にしていへば、心を俳諧にするといふことである。此の二つは、彼にとつては偶然の關係では無く、寧ろ必然的な、離さうとしても離されない深い關係に立つものと思はれる。彼にとつては、俳諧を作ることが、彼の生活の方便でもあつたけれども、同時に彼自身の生活を作り上げて行くことであり、又彼の人格を大成して行く道であつた。彼の俳諧の特質の寂は、獨り彼の俳諧の特質でなく、彼の生活の特質であり、彼の人格の光であつた。

彼の傳記を案じ、彼の實際の生活を見ると、彼は現實のあらゆる慾望を捨て去つて、所謂隱遯の生活、行脚の生活に入つたのである。さうして、其處に心身の安易なる生活を見出さうとした。功名・富貴といふ様な現實の桎梏から離れて、纔に膝を容れるばかりの陋屋に住み、友人や門人達の惠む衣服・食物を以て満足し

ようとした。衣服も寒暑を凌ぐを程度として、たとひ柔い絹物は恵まれてもこれを謝絶して居る。食物も生命を繋ぐを以て満足しようとしてゐた。酒を飲んでも、無論肴に贅澤を言はない。かく慾望を退けて、現實の煩瑣を避け、自然の儘の簡易について、其處に靜かな安らかな心持を味はうとして居たのが彼の生活である。閑寂にして物に役せられず、拘束されない生活を樂しみ、そこに人生の妙趣を見出さうとして居た。彼が最も私淑した古人は西行法師である。西行に私淑して居たのは、獨り西行の歌を愛したのみでなく、西行の人格とその簡易な放浪生活とに深い共鳴を感じて居たものと思ふ。かく言へば、芭蕉の生活は全く隱遯的のものであり、退嬰的のものであり、消極的のものであり、従つて彼の寂といひ、閑寂といふのも、ただ自分の肉體精神の安易を享樂するといふ、極めて安價な生活に過ぎな

西行法師

俗名佐藤義清鳥羽上皇に仕へ後出家して諸國を放浪した。有名な歌人、建久三年二月十六日河内國にて入寂した、年七十三。

つたやうに思はれる。彼の生活は果して一つの享樂生活であり、彼の俳諧も亦享樂的のものに過ぎないであらうか。深く考へて見れば、彼の生活は單に享樂的のもので無く、同時に彼の俳諧の寂も、少し充實したものと考へられる。

彼には更に進んで、自然の懷に走り、自然の生命を擱んで、それによつて人間生活の内容を向上させようとする態度があつた。芭蕉が自然に走つたのは、ただ都門の生活の競争場裡に没頭した俗人が、時々都門の煩雜を別荘に避けて、山水の間に閑適を貪らうとする様な浅いものでは無い。彼は自然に對する深い憧れを持つて、自然の底の底まで達して、其處に自然の生命を掴まうとしたものである。譬へば、古池や蛙飛込む水の音、閑かさや岩にしみ入る蟬の聲、或はよく見れば、薺花咲く垣根かな、明月や池をめぐりて夜もすがら、等、人口に膾炙した名吟を味へば、文字

の上に表れた自然は、ありふれたものである。併し是等の句を通じて、芭蕉が自然の奥に潜んでゐる微妙の響に耳を澄して居た態度、ちつと自然の神髓を見つめて居る態度、自然の中に自分を投込んでゐる態度を見なければならぬ。

芭蕉の言葉に

それ天地は風雅なり。萬象も亦風雅なり。と云ふのがある。風雅は自然の美趣とも解せられよう。美趣は天地萬象の中に客觀的に存在するものではなく、自然に對する人の主觀の中に、又は其の態度の中に見出されるものである。自然を研究する科學者に對しては、自然は風雅ではない。自然の美を求め、自然の生命を探る人に取つて、始めて風雅といはれるであらう。芭蕉がその私淑した西行法師の像に、
すて果てて身は無きものと思へども、

すて果てて
芭蕉が、西行像
に賛した言葉、
許六の本朝文選
に載つてゐる。

雪の降る日は寒くこそあれ、
花のふる日は浮かれこそすれ。

と賛した。此の添加された芭蕉の一句を得て、此の言葉が西行の原歌以上に深い味ひを持つやうになつてゐる。世を捨てて出家した身にも現實の苦しみはある。西行の歎きは其處にとどまるが、芭蕉はそこに一步を進め、現實を離れようとするものにも、自然の美、自然の生命に觸れては、自ら心の躍動することを禁じ得ない心持のあることを加へたものと思ふ。此の浮かれる心は自然に陶醉した心持で、即ちそれが彼の所謂風雅の情であらうと思ふ。猶彼の文に、

風雅に於けるもの、造化に従ひ四時を友とす。見る所花にあらずといふことなし、思ふ所月にあらずと云ふことなし。形花にあらざる時は夷狄に等し。心、月にあらざる時は鳥獸に

類す。夷狄を出て鳥獸を離れて、造化に従ひ造化に還れとなり。

ともある。造化といふ言葉は、自然の生命或は自然の意志と見るべき言葉と解する。四時といふのは、其の生命の形に表れた現象の自然である。四時に應じて變化するのが自然現象のならひであるから、これを四時と稱へたのであらう。故にこの引用句の意味は、自然をば自然の意志の儘に、其の現象を見て友とせよ。自然を征服し、利用するといふ考を離れて、自然のありのままに接し交はり、さうして自然の生命を捉へよ。さうすればあらゆる自然の現象は、悉く花ならぬはなく月ならぬはなく、自然の美趣は我等の前にあらはれ、かくして自然の美を樂しみ得る所に、人間が夷狄禽獸と違ふ尊さがあるのである。それが即ち風雅である。其の風雅を知らぬ者は、人間でなく、人生の眞の

味ひを知るものではないといふことになる。此處までの意ならば、やはり彼は自然の享樂者に過ぎない様であるが、最後の句に「造化に従ひ、造化に還れ」と宣言してゐる。これは西洋の「自然に還れ」の叫びである。人間が昔から今日まで自ら作りあげたあらゆる桎梏拘束を離れて、それ等の爲に變形せられた人生の姿から脱出して、人間本然の姿に立歸れといふことは、彼の生活に對する理想であつた。こゝに至れば、最早自然の享樂には止らないのである。人生の此の大理想を一句の上に表したのが、かの

もろくの心柳にまかすべし。

の句であらう。これは芭蕉の理想である。それがために「任すべし」とはいふのであらう。人生の悲しみなどの一切の心をあげて、これを大自然に任せて、自然に歸れといふ叫びを、此の一句

に表はしたものであらう。人間の知識學問を以て、無理に自然に抗すること無く、自然に合致した新しい生活を求めた彼の心を、此の一句に表したのであらう。芭蕉が極端の貧乏に處し雲水の生活に身を任せて居たのは、外面的には無爲の生活の様であるが、内面的には複雑な積極的な意味があることは、右の句から考へ得られると思ふ。かく芭蕉は自然に復歸することを求めたが、彼はこの大理想を成遂げ得たかといふにもとより成遂げ得なかつた。唯理想を求めて努力した其の跡をば、彼の藝術に残してゐる。此の大なる理想は、絶えず人間の大きな理想として残り傳はり行くべきものである。此の理想を追求して、絶えず眞摯の態度を以て努力を續けた間の彼の心の動搖が、彼の藝術であると思ふ。彼の俳諧が、享樂的の俳人の、自然を楽しんでだ俳諧と撰を異にするのは此處にあるのである。

然らば芭蕉は、自然の生命、造化をば、どういふ風に解釋したか。芭蕉は哲學者ではないから、何とも之に就いて説明を残して居ない。又之に對して宗教的の禮拜祈願をしても居ないが、彼は常に自然に接し、これを唯現象として見てすまずことが出来なかつた。自然の現象を見つめる毎に、現象の奥深く隠れてゐる生命を見出して、それに造化の名を命じたのである。そしてそれに絶えず憧れの心を捧げてゐた。そしてその生命は現象の奥深く隠れてゐて、俗人の容易に認めることを許さぬものであるから、之を幽玄といつてゐる。それと共に、又現象は千變萬化するけれども、其の生命は萬古不易、寂然不動の姿をなすことを認めて、閑寂ともいつてゐる。即ち造化は幽玄にして閑寂なるものといふのが、芭蕉の自然觀の根本であらう。世間で「古池や蛙飛込む水の音」の句を、芭蕉の蕉風開眼の句といふは恐らく附

芭蕉
芭蕉の起した俳諧の風。正風ともいふ。

寶井其角
本姓榎本氏。寛文元年七月江戸に生れた。俳人。芭蕉門人十哲の一人。寶永四年二月歿。四十七。

會の説であるが、この一句が芭蕉の俳諧の眞髓を得た句であり、芭蕉の會心の一句たることを是認することは不當でないと思ふ。一日芭蕉は草庵に閑居して默然沈思してゐた。すると、小庵の前の小さい池に蛙が飛込んで、其の水音が彼の鼓膜に響いたと想像してみる。しんとした天地の静寂の中に、此の水音の唯一つの響が起り、それが默想に耽つた芭蕉の心に觸れて、彼の主觀をかき起し、彼は常に憧れ、常に求めてゐた閑寂、幽玄の自然の眞の姿を、まさしくと眼の前に見た。さうして自然の生命はこゝだとはばかり、何等の技巧を加へずに、此の心持を表現したのが此の句となつたと考へる。若し此の初五の「古池や」を、寶井其角が技巧的に「山吹や」と置き代へた通りにすれば、此の句は全く變化してしまふ。又若し是に「閑かさや」といふが如き、心持を限定した句を加へ得るとしたならば、此の一句は大いに深さを減

じて、文字に表されたそれだけの句とならう。「古池や」といふ、何等の技巧を持たぬ有りの儘の心をおいてあるから、全體の句は寧ろ暗示的になり、單刀直入に我等の主觀に薄つて來るのである。さうして何らかそこに深い或ものが句の中に潜んでゐることを思はせ、それが自然の祕密の謎である様に思はせる。寂靜中一つの響が、天地の祕密を解く鑰となつて我等の心に或默會が起つて、成程自然は幽玄、閑寂であるといふことに、否み難い同感を持たせるものであると思ふ。

かく見て來れば芭蕉は現實に對しては消極的退嬰的なることを免れぬが、自然には積極的で、進んで自然の眞相を開き、自然の奥まで行つて、その生命を掴まうとした人である。現實に對しては、芭蕉は溫情は持つてゐたが、熱意は持つて居なかつた。自然に對しては、實に燃ゆるが如き熱意がある。一切の慾望を

棄てて自然の懷に赴いたのは、此の熱意に由つたものと思ふ。さうして自然と人生とを結合することによつて、其處に新たな人生の理想を見出して、自然に還れ。の叫び聲を揚げてゐるのであらう。さうして見れば、自然と人生に對する此の如き態度から産まれた彼の生活は、徒に無爲なる生活とは言へない、内容の無い空疎の生活とは言へない、倦怠した生活とは言へないのである。少くとも、其處に充實性と緊張味とを失はなかつた生活であると思ふ。よし現實に退嬰的消極的であつたとしても、現實にとらはれてゐないから、彼の心境は他の因襲に拘束された俗衆と違ひ、大いに自由であつたといはねばならぬ。この自由の心をもつて、芭蕉は一途に自然に向つて走り、その生命を擱まうとしたのである。芭蕉の眼前には、自然は單に自然として現れず、造化として現れた。春夏秋冬に變化して、しかも刹那も止ま

らないで、永遠に渉る不易のものとして現はれた。斯うして芭蕉の生活は、外面的には消極的に無爲に見えても、内面的には可なり積極的の意味を持つてゐたと思ふ。彼の藝術が現實に對する教訓も智識も與へぬのは、芭蕉の生活が現實に退嬰的消極的であつた爲であらう。彼の藝術が自然に對する無限の感銘を我等に與へ、更に永遠の人生に對して大なる暗示と慰藉とを與へるのは、これが爲であると考へる。(上方便文學と江戸文學)

一七 子規におくる書 夏目漱石

一丈餘の長文被下、難有拜見、小子俳道發心につき、色々の御教訓、何よりも嬉しく熟讀仕候。天稟庸愚のそれがし、物になるやらならぬやら覺束なき儀には存候へども、性來かかる道は下手の横好とやらに候へば、向後驥尾に附して精々勉強可仕候間、何

子規

名は當規、松山市の人、俳人、明治三十五年歿、年三十六。

夏目漱石

名は金之助、慶應三年東京に生れた。明治文壇に於ける有名な小説家。文藝評論家。大正五年十二月歿。

卒御鞭撻被下度候。

佛頭の天糞
善美なる著書に
拙悪なる序文を
冠するを譏る語
「歐陽修五代
史、或作序冠
其前、王安石曰、
佛頭上豈可著
糞」(典籍便覽)

玉作數首謹んで拜見、俳句はいづれも美事に御座候。仰せの如く、句調の具合先日中拜見仕候者と、夙かに別機軸の御手際と感心仕候。峽中雜誌第一、五首中の翹楚と存候。管々しき細評は佛頭の天糞とやらにつき御免蒙り候。實は負けぬ氣に次韻でもして、君の一祭を博せんと存居候處、去月下旬一族中に不慮の不幸を生じ、其が爲彼是取紛れ、只今にては硯に對する閑暇はあれど、筆を執る忍耐力なく、幼學詩韻をひねくり廻す騒ぎにも參り兼ね候間、次韻の儀も願下に致候。

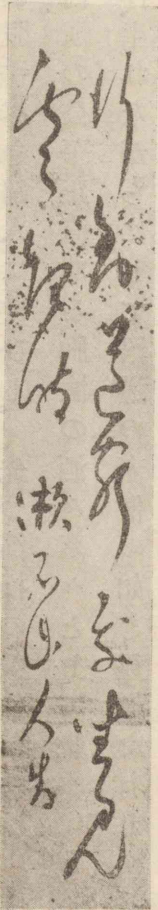
不幸と申し候は餘の儀にあらず、小生嫂の死亡に御座候。實は去る四月中頃より風邪の氣味にて、床につき、その後、兎角打勝れず、漸次重症に陥り、遂に浮世の夢廿五年を見殘して、冥土へまかり越し申候。天壽は天命、死生は定業とは申しながら、洵に洵

に口惜しき事致候。

わが一族を稱揚するは何となく大人氣なき儀には候へども、彼女程の人物は男にも中々得易からず、況て婦人中には恐らく有之まじくと存居候。そは夫に對する妻として完全無缺と申す儀には無之候へども、社會の一分子たる人間としては、まことに敬服すべき婦人に候ひし。先づ節操の毅然たるは申すに不及、性情の公平正直なる、胸懷の洒々落落として、細事に頓着せざる、杯、生れながらにして悟道の老僧の如き見識を有したるか、と怪まれ候位、鬚髻鬢々たる生悟りのえせ居士はとて、も及ばぬ事、小生自ら慚愧仕候事幾回なるを知らず、かゝる聖人も長生きは勝手に出來ぬ者と見えて、遂に魂歸冥漠、魄歸泉、只住人間廿五年と申す場合に相成候。さはれ平生佛を念じ不申候へば、極樂にまかり越す事も叶ふまじく、耶蘇の子弟にも無之候へば、天堂に

筆蹟

行到道窮處、坐見雲起時
漱石山人書



蹟筆石漱日夏

鷗外

名は林太郎。萬延元年島根に生れた。醫學博士、文學博士。大正十一年歿、年六十三。

再生せん事も覺束なく、一片の精魂もし宇宙に存するものならば、二世と契りし夫の傍か平生親しみ暮しし義弟の影に髣髴たらんかと、夢中に幻影を描き、ここかかしこかと浮世の羈絆にながる、死靈を憐み、うたゝ不便の涙にむせび候。母を失ひ、伯仲二兄を失ひし身のかかる事には馴れ易き道理なるに、一段毎に一層の悼惜を加へ候は、小子感情の發達未だ其の頂點に達せざる故にや。心事御推察被下度候。

鷗外の作ほめ候とて、圖らずも大兄の怒を惹き申譯も無之、是も小子嗜好の劣等なる故と、只管慚愧致居候。元來同人の作は僅かに二短篇を見たる迄にて、全體を窺ふ事かたく候へども、當

世の文人中には先づ一角ある者と存居候ひき。試みに彼が作を評し候はんには、結構を泰西に得、思想を其の學問に得、行文は漢文に胚胎して和俗を混淆したる者と存候。右等の諸分子相聚つて、小子の目には一種沈鬱奇雅の特色ある様に思はれ候。尤も人の嗜好はその人の受けたる教育にて種々なる者なれば、己は公平の批評と存候うても、他人には極めて偏屈なる議論に見ゆる事もある者に候へば、小生自身は洋書に心酔致候心持はなくとも、大兄より見れば、左様に見ゆるも御尤もの事に御座候。全體あの時君と僕の嗜好は是程違ふやと驚き候位。併し退いて考ふれば、是前にも言へる如く、元來の嗜好は同じきも、學問の行き掛りにてかかることに立ち到り候事と存じ、夫よりは可成博覽をつとめ偏僻に陥らざらん様に心掛居候。其の上日本人が自國の文學の價値を知らぬと申すも、日本好きの君に面目な

司馬江漢

名は峻、字は君岳、江漢、春波樓、不言道人等の號がある、はじめ浮世繪、後に洋畫を畫く。文政元年十月歿。七十二歳。谷文晁に師事した。

春波樓筆記

一卷、著者司馬江漢の所感の輯録。文化八年冬

きのみならず、日本に夫程よき者のあるを打ち棄てて、わざく洋書にうつゝをぬかし候事、馬鹿々々しき限りに候のみならず、我等が洋文學の隊長とならん事、思ひも寄らぬ事と、先頃中より己と己の貫目が分り候へば、以後は可成大兄の御勧めにまかせ、邦文學研究可仕候。さはれ成童の頃は、天下の一人と自ら思ひ上り、三身の己を欺いて今迄知らずに打ち過ぎけるよと思へば、自ら面目なき迄に愧入候。性來多情の某、何にても手を出しながら、何事もやり遂げぬ段、無念とは存候へども、是亦一つは時勢の然らしむる所と諦め居候。御憫笑被下度候。頃日來司馬江漢の春波樓筆記を讀み候が、書中往々小生の言はんと欲する事を發揮し、意見の暗合する事、間々有之、圖らず古人に友を得たる心にて、愉快に御座候。此は序ながら申上候。時下炎暑の砌、御尊體精々御いとひ可被成候。拜具

十月脱稿

人物

シテ 源義經の

靈

(前は漁翁)

シテツレ 漁夫

ワキ 旅僧

八島

屋島とも書く。

讃岐國屋島山の北方。

漁翁夜西岸

漁翁夜傍(西岸)

宿、曉波(清湘)

燃(楚竹)

(古文前集、柳宗元)

子規様

八月三日

金之助

一八 八 島

(一)

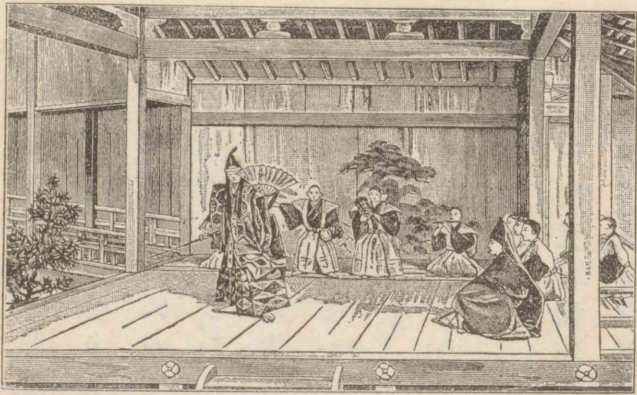
ワキ、月も南の海原や、海原や、八島の浦を尋ねむ。是は都方より出でたる僧にて候。我未だ四國を見ず候程に、此の度思ひ立ち西國行脚と心ざし候。春霞うき立つ浪の沖つ舟、おきつ舟、いり日の雲も影添ひて、其方の空と行く程に、はるばるなりし舟路經て、八島の浦に着きにけり。

ワキ、急ぎ候程に、是は早讃岐の國八島の浦に着きて候。日の暮れて候へば、是なる鹽屋に立寄り、一夜を明さばやと思ひ候。面白や、月海上にうかんで、波濤夜火に似たり。漁翁夜西岸に

一葉萬里の舟
蘇軾の詩に
十八灘頭一葉
身。
しらぬ火の
筑紫の枕詞。

そうて宿す。 曉湘水を汲んで楚竹を焚くも、今に知られて蘆火の影、ほの見えそむる物すごさよ。月の出潮の沖つ波。霞のをぶね、こがれ来て、あまの呼聲里ちかし。一葉萬里の舟の道、唯一帆の風に任す。夕の空の雲の浪、月の行方に立消えて、霞にうかぶ松原の影は緑にうつろひて、海岸其處ともしらぬひの、筑紫の海にやつづくらん。爰は八島の浦づたひ、海人の家居も數に、釣の暇も波のうへ、波のうへ、霞みわたりて沖ゆくや、あまの小舟のほのぼのと、見えて残る夕暮。浦風迄も長閑なる、春や心を誘ふらん。春や心を誘ふらん。先づ、鹽屋に歸り休まうずるにて候。

鹽屋の主のかへりて候。 立ちこえ宿をからばやと思ひ候。いかに、是なる鹽屋のうちへ案内申し候。誰にて渡り候ぞ。諸國一見の僧にて候。 一夜の宿を御かし候へ。暫く御待ち候へ



八島(能)舞臺面

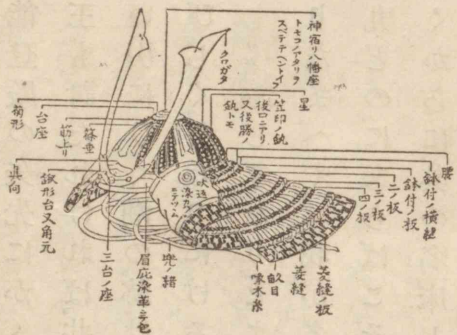
主に其の由申し候べし。 いかに、申し候。 諸國一見の御僧の一夜の御宿と仰せ候。易き程の御事なれども、餘りに見苦しく候程に、御宿は叶ふまじき由申し候へ。御宿の事を申して候へば、餘りに見苦しく候程に叶ふまじき由仰せ候。いや、見苦しきは苦しからず候。殊に是は都方の者にて、此の浦始めて一見の事にて候が、日の暮れて候へば、平に一夜と重ねて御申し候へ。心得申し候。唯今の由申して候へば、旅人は都の人にて御入り候が、日暮れて候へば、平に一夜と重ねて仰せ候。何、旅人は都の人と

高松
八島の向浦。
などか雲居に
天つ風ふけひの
浦に居る田鶴の
などか雲居に歸
らざるべき(新
古今集)

申すか。さん候。實に痛はしき御事哉。さらば御宿をかし申さん。本來すみかも蘆の屋の、唯草枕と思召せ。しかも今宵は照りもせず、曇りも果てぬ春の夜の、朧月夜にしく物もなき蟹のとま、八島にたてる高松の苔のむしろは痛はしや。扱なぐさみは浦の名の、むれゐるたづを御覽ぜよ。などか雲居に歸らざらん。旅人の古郷も、都と聞けばなつかしや。我らももとは。とて、やがて涙にむせびけり。

いかに、申し候。何とやらん似合はぬ所望にて候へども、いにしへ、此處は源平の合戦のちまたと承りて候。夜もすがら語つて御聞かせ候へ。安き間の事、語つて聞かせ申し候べし。いで、其の比は元暦元年三月十八日の事なりしに、平家は海のおもて一町許に舟を浮かべ、源氏は此の汀に打出て給ふ。大將軍の御出立には、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の御着背長、鍔ふんばり、鞍

一院
後白河上皇。



笠につつ立ちあがり、一院の御使、源氏の大將檢非違使五位の尉源の義經。と名のり給ひし御こつがら、あつばれ大將や。とみえし今のやうに思ひ出でられて候。其の時平家の方よりも、言葉戦事終り、兵船一艘漕ぎよせて、浪うちぎはにおりたつて、陸の敵を待ち掛けしに、源氏の方にもつづく兵五十騎許。中にも三保の谷の四郎と名のつて、眞先かけてみえし所に、平家の方にも、悪七兵衛景清と名のり、三保の谷をめがけ戦ひしに、彼のみほのやは其の時に、太刀打折つて力なく、すこし汀に退きしに、景清追つかけみほのやが、きたる胃の鉦をつかんで、うしろへ引けば、みほのやも、身も遁れむと前へひく。互に「えいや」と、

菊王
教經の童。

く力に、はちつけの板より引きちぎつて、左右へくわつとぞのき
にける。是を御覽じて、判官御馬を汀に打寄せ給へば、佐藤繼信
能登殿の矢先にかゝつて、馬より下にどうと落つれば、舟には菊
王も討たれければ、共に哀れと思しけるが、舟は沖へ陸は陣に、あ
い引にひく潮の跡は鬨の聲たえて、いその浪松風ばかりの音、さ
びしくぞなりにける。

ワキ、ふしぎなりとよ、あま人の餘り委しき物語。其の名をなの
りたまへや。シテ、我が名を何とゆふ浪の、ひくや夜潮も朝倉や、木の
丸どのにあらばこそ、名乗をしてもゆかまし。實にや言葉を聞
くからに、其の名床しき老いびとの、シテ、昔を語る小忌衣、ころしも
今は春の夜の、潮の落つる曉ならば、修羅の時になるべし。其の
ときは我が名やなのらん。たとひ名のらずとも、名のととも、義
經の浮世の夢ばしさまし給ふなよ。

朝倉や
朝倉や木の丸殿
にわれをれば名
のりをしつゝ、行
くは誰が子ぞ
(天智天皇御歌、
新古今集)

ワキ、ふしぎや、今の老人の、其の名を尋ねし答にも、義經の世の夢
心、さまさでまてと聞えつる。聲も更け行く浦風の、松がね枕そ
ば立てて、思をのぶる苔むしろ、重ねて夢を待ち居たり。

(一一)

ワキ、ふしぎやな、早曉にもなるやらんと思ふ寢覺の枕より、甲冑
を帶しみえ給ふは、若し判官にて在すか。シテ、我義經が幽靈なるが
臆恚に引かるゝ妄執にて、猶西海の浪にただよひ、生死の海に沈
淪せり。愚やな、心からこそ生死の海ともみゆれ。眞如の月の、
シテ、春の夜なれど曇なき、心も澄める今宵の空。昔を今に思ひ出
づる、シテ、舟と陸との合戦の道。所がらとて、シテ、忘れえぬ武士の八
島にいるやつき弓の、もとの身ながら、また爰に、弓箭の道は迷は
ぬに迷ひけるぞや、生死の海山離れやらで歸る八島の恨めしや。
とにかくに執心の残りの海の深きよに、夢物語申すなり。

閻浮
閻浮提の略。
須彌山の南に在
る洲。

兼房
義經の臣、
増尾十郎權頭。
渡邊にて
梶原景時と逆鱗
の論をした時。

「思忘れぬ物を閻浮の故郷に、さつて久しき年なみの、よるの夢路の通ひきて、修羅道の有様顯すなり。」シテ思ひぞ出づる昔の春、月も今夜に亘えかへり、本の渚はここなれや。源平互に矢先を揃へ、舟を組み、駒を並べて、打入れ打入れ、足並にくつばみを浸して攻め戦ふ。シテ其の時何とかしたりけん、判官弓を取落し、浪に揺られて流れしに、思其の折しもは引潮にて遙に遠く流れゆくを、シテ敵に弓を取られじと、駒を浪間に泳がせて、敵船近くなりし程に、思敵は是を見しよりも、船を寄せ熊手にかけて、既に危く見え給ひしに、シテされども熊手を切り拂ひ、終に弓を取返し、元の渚に打上れば、思其の時兼房申すやう、「口惜しの御ふる舞やな。渡邊にて景時が申ししも、是にてこそ候へ。たとひ千金をのべたる御弓なりとも、御命には換へ給ふべきか。」と涙を流し申しければ、判官是を聞きしめし、「いやとよ、弓を惜しむにあらず、義經源平に弓箭

智者は惑はず
論語「子曰智者
不惑、仁者不
憂、勇者不懼」

壇の浦
長門下關と引島
の間、平家滅亡
の處。

を執つて私なし。然れども、佳名は未だ半ばならず。されば此の弓を敵に取られ、義經は小兵なりといはれんは、無念の次第なるべし。よし、それ故に討たれんは力なし。義經が運の極めと思ふべし。さらば敵に渡さじとて、浪に引かるゝ弓取の名は末代にあらざや。」と、かたり給へば、兼房さて其の外の人迄も皆感涙をながしけり。智者は惑はず、思勇者は恐れずのや、たけ心の梓弓、敵には取傳へじと、惜しむは名のため、惜しまぬは一命なれば、身を捨ててこそ後記にも、佳名をとどむべき弓筆のあととなるべけれ。」

シテ又修羅道の関の聲、思矢叫びの音震動せり。シテ今日の修羅の敵はたぞ。なに、能登守教經とや。あら物々しや、手なみはしりぬ。思ひぞ出づる、壇の浦の、思其の船軍。今は早、今は早、閻浮にかへる。生き死にの海山一同に震動して、舟よりは関の聲、シテ陸

水や空
水やそら空や水
とも見えわかず
通ひてすめる秋
の夜の月（新後
拾遺集、讀人不
知。）

幸田露伴
名は成行、文學
博士、慶應三年
東京に生れた。
明治文壇の著名
なる小説家。
當寺
谷中感應寺。

には波の楯。月にしらむは、劍の光、潮に映るは、かぶとの
星の影。水やそら空ゆくもまた雲の波の、打ちあひさしちがふ
る船軍のかけひき、うきしづむとせし程に、春の夜の浪より明け
て、かたきとみえしは群れ居るかもめ。鬨の聲と聞えしは浦風
なりけり。高松の浦風なりけり。高松の朝嵐とぞなりにける。

一九五 重塔

幸田露伴

(一)

明日辰の刻頃までに自身當寺へ來るべし、豫て其の方工事仰
せつけられたきむね、願ひたる五重塔の儀につき、上人直接に御
話示あるべきよしなれば、衣服等失禮なきやう心得て出頭せよ
と、嚴格なる口上に源太も敬ひ謹んで、承知の旨を頭下げつゝ、答
へける。さて其の翌日となれば、源太は鬚剃り月代して衣服を

源太
江戸ッ子の生粹
著名の番匠、川
越源太と云ふ棟
梁。

十兵衛
のつそりと茂ま
るゝ大工。伎倆
は源太に劣らぬ
棟梁。

あらため、今日こそは上人の自ら我に御用仰せつけらるゝなる
べけれど、勢込んで庫裏より通り、とある一間に待たされて坐を
正しくし控へける。



谷中天王寺五重塔

態こそかはれ、十兵衛も、心
は同じ張を有ち、導かるゝま
ま打通りて人氣の無きに寒
さ湧く一室の中に、唯一人兀
然として、今や上人の呼びた
まふか、五重の塔の工事一切
汝に任すと命令たまふか、若
し又我には命じたまはず、源太に任すと定めたまひしを、我にこ
とわるため呼ばれしか。然にもあらば何とせむ、浮むよしなき
埋れ木の我が身の末に、花咲かむ頼みも永く無くなるべし。唯

願はくは、上人の我が愚かしきを憐みて、我に命令たまはむことをと、九尺二枚の唐襖に、金鳳銀鳳翔り舞ふ、其の箔模様の美しきも眼に止めずして、茫々と暗路に物を探る如く、念想を空に漂はすこと良久しきところへ、例の利口げな小僧いで來りて、方丈さまの召しますほどに、此方へおいでなされましと、先に立つて案内すれば、すはや願望の叶ふとも叶はざるとも定まる時ぞと、魯鈍の男も胸を騒がせ、導かるゝまゝ、隨ひて、一室の中へずつと入る途端に、此方をぎろりつと見る眼鏡く、怒を含んで斜に睨むは思ひがけなき源太にて、座に上人の影もなし。事の意外に十兵衛も足踏みとめて、突立つたる儘一言もなく白眼合ひしが、是非なく疊二ひらばかりを隔てしところに漸く坐り、力なげ首悄然と、己が膝に氣勢のなきたさうなる眼を注ぎ居るに引き替へ、源太は小狗を瞰下す猛鷲の、風に臨んで千尺の巖の上に立つ風情、

腹に十分の強みを抱きて、背をも屈指ねば肩をも歪めず、すつきり端然と構へたる風姿と云ひ、面貌といひ、水際立つたる男振り、萬人が萬人とも好かずに居られまじき、天晴小氣味のよき好漢なり。

されども、世俗の見解には墮ちぬ心の明鏡に照らして、彼れ此れ共に愛し、表面の美醜に露泥まれざる上人の、却つて何れをと、昨日までは擇びかねられしが、思ひつかるゝことのありしか、今日はわざゝ二人を呼び出されて、一室に待たせ置かれしが、今しも靜かに居間を出られ、疊踏まるゝ足も軽く、先に立つたる小僧が襖明くる後より、すつと入りて座につきたまへば、二人は恭ひ敬みて共に齊しく頭を下げ、少時上げも得せざりしが、那方を那方と判かぬる二人の情を汲みて知る上人もまた中々に、口を開かん便宜なく、暫時は靜まりかへられしが、源太十兵衛とも

に聞け、今度建つべき五重塔は唯一つにて、建てんといふは汝達二人、二人の願を雙方とも聞届けては遣りたけれど、其は固より叶ひがたく、一人に任さば一人の歎き、誰に定めて命令けんといふ標準のあるではなし。役僧用人等の分別にも及ばねば、老僧が分別にも及ばぬほどに、此の分別は汝達の相談に任す。老僧は關はぬ。汝達の相談の纏まりたる通り取り上げてやるべければ、熟く家に歸つて相談して來よ。老僧が云ふべき事は是ざりぢやによつて、左様心得て歸るがよいぞ。さあ確と云ひ渡したぞ。既早歸つてもよい。併し今日は老僧も閑暇で、退屈なれば、茶話の相手になつて少時居てくれ。浮世の噂など、老僧に聞かせてくれぬか。其の代り老僧も古い話の可笑なを二ツ三ツ、昨日見出したを話して聞かさうと、笑顔やさしく、朋友かなんぞのやうに、二人をあしらふて、さて何事を言ひ出さるゝやら。

(二)

小僧が持つて來し茶を、上人自ら汲み給ひて侷めらるれば、二人とも勿體ながりて恐入りながら頂戴するを、さう遠慮されては、言葉に角が取れいで、話が丸う行かぬは、さあ菓子も挾んではやらぬから、勝手に摘まんでくれと高杯押遣りて、自らも天目取り上げ、喉を濕したまひ、面白い話といふも、桑門の老僧等にはさう澤山無いものながら、此の頃讀んだ御經の中に、つくづく成程と感心したことのある。聞いてくれ、かういふ話ぢや。むかし某國の長者が、二人の子を引きつれて、麗かな天氣の節に、香のする花の咲き、軟かな草の滋つて居る廣野を、愉快げに遊行したところ、水は大分に夏の初め故涸れたれど、猶清らかに流れて岸を洗うて居る大きな川に出逢うた。其の川の中には珠のやうな小礫やら、銀のやうな砂で成つて居る美しい洲のあつたれば、長

高杯

食物を盛る器。

天目

茶家にて抹茶をたてるに用ふる、浅くひらいた播鉢形の茶碗。

播鉢

者は興に乗じて一尋ばかりの流を無造作に飛び越え、彼方此方を見廻せば、洲の後面の方もまた一尋ほどの流で、陸と隔てられたる別世界、全然浮世の腥い土地とは懸絶れた清淨の地であつたまゝ、獨り歡び喜んで踊躍したが、涉らうとしても涉り得ない二人の兒童が、羨ましがつて喚び叫ぶを可憐に思ひ、汝達には來ることの出來ぬ清淨の地であるが、さ程に來たくば渡らしてやるほどに特つて居よ。見よ見よ、我が足下の此の磧は、一々蓮華の形狀をなし居る世に珍しき磧なり。我が眼の前の此の砂は、一々五金の光を有てる比類稀なる砂なるぞと説き示せば、二人は遠眼にそれを見て、いよゝゝ焦躁り渡らうとするを、長者は徐に制しながら、洪水の時にでも根こぎになつたるらしき棕櫚の樹の一尋餘りなを架け渡して橋としてやつたに、我が先へ、汝は後にと兄弟争ひ鬪いだ末、兄は兄だけ力強く、弟を終に投げ伏せ

て、我意の勝を得たに誇り高ぶり、急ぎ其の橋を渡りかけ、半途に漸く到りし時、弟は起き上りさま、口惜さに力を籠めて橋を盪かせば、兄は忽ち水に落ち、苦しみ泳いで洲に達せしが、此の時弟はもう其の橋を難なく渡り超えかくるを見るより、兄も其の橋の端を一搖り揺り動せば、固より丸木の橋なる故、弟も堪らず水に落ち、僅かに長者の立つたるところへ濡れ滴りて這ひ上つた。

その時長者は歎息して、汝達には何と見ゆる。今汝等が足踏みかけしより、此の洲は忽ち前と異なり、磧は黒く醜くなり、砂は黄ばめる普通の砂となれり。見よゝゝ、如何にと告げ知らずるに、二人は驚き眼を睜りて見れば、全く父の言葉に少しも違はぬ砂磧、あゝかかるもの取らんとて可愛き弟を惱ませしか、尊き兄を溺らせしかと、兄弟共に慚ぢ悲みて、弟の袂を兄は絞り、兄の裾を弟は絞りて、互に恤り慰めけるが、彼の橋をまた引き來りて、洲

の後面なる流に打ちかけ、もう此の洲には用なければ、尙も彼方に遊び歩かん。汝達先づこれを渡れと、長者の言葉に兄弟は顔を見合ひて、先刻には似ず、兄上先に御渡りなされ、弟よ先に渡るがよいと譲り合ひしが、年順なれば兄先づ渡る。其の時に、轉びやすきを氣遣ひて、弟は端を揺がぬやう確と抑ふる。其の次に、弟渡れば兄もまた揺がぬやうに抑へやり、長者は苦もなく飛越えて、三人ともにいと長閑く、徐に歩む其の中に、兄が圖らず拾ひし石を、弟が見れば美しき蓮華の形をなせる石、弟が摘み上げその砂を、兄が覗けば、眼も眩く五金の光を放ちて居たるに、兄弟ともども歡喜び樂しみ、互に得たる幸福を互に深く讚歎し合ふ。その時長者は懷中より眞實の璧の蓮華を取り出し、兄に與へて弟にも眞實の砂金を袖より出して大切にせよと與へたといふ話してしまへば小兒欺しのやうぢやが、佛説に虚言は無い。小

兒欺しでは決してない。噛みしめて見よ。味のある話ではな
いか。如何ぢや。汝等にも面白いか。老僧には大層面白いが
と、軽く言はれて深く沁む、譬喩方便も御胸の中にもたる、眞實
から。(尾花集)

二〇 人臣の道

凡そ玉土にうまれて忠を致し身を捨つるは、人臣の道なり。
必ずこれを身の功名と思ふべきにあらず。されど、後の人を勵
まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてき
ほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功もなくし
て過分の望をいたすこと、自ら危うするはしなれど、前車の轍を
見ることは、まことに有難き習なりけんかし。中古までも、人の
さのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る

鳥羽院
人皇第七十四代

心あり、果して身を滅し家を失ふためしあれば、戒めらるゝも理なり。

鳥羽院の御代には、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべし。といふ制符たびありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徴し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなきことになりけり。

この頃の諺には、一たび軍に駈合ひ、或は家子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては日本國を賜へ。もしは半國を賜はりても足るべからず。などぞ申すめる。誠にさまざま思ふことはあらしなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、また朝威の輕々しさも推量らるゝものなり。言語は君子の樞機なり。と

神皇正統記

北畠親房の著。小田城中にあつて大義を明かにするために此を著した。建國の初めから筆を起し、後村上天皇の即位に終つてゐる。

永田秀次郎
兵庫縣の人、明治九年生、東京市長、貴族院議員。

いへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣賊子といふものは、その初心言葉を憤まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色いろの改まるにもあらず、人の心の悪しくなりゆくを末世とはいへるにや。(神皇正統記)

二 我が國民の進路 永田秀次郎

我々は近時餘りに物質文明に捉はれて居つた。世界大戦争中に行はれた殘忍なる殺人行爲は、慥に泰西文明に對する我々の尊敬を喪はしめた。爾の隣人を愛せよと云ふ教義が、何處に行はれて居るのか、右の頬を打たれたら左の頬を向けよといふ忍耐は、何人が行つて居るのか。我々は仁義を説いて利慾を退

僧侶の云々
Do what the
friar says, not
what he does.

けた孔孟の教を支那から學んだ。而も支那の實際は最も利慾を重んずるものであるを知つた。我々は慈悲の大道を佛教に學んだ。而も印度には今や佛教が滅んで居る事を知つた。我は博愛の教を耶蘇教に學んだ。而も耶蘇教國は爾の隣人を愛せざるものなる事を知つた。僧侶の説く所を行へ、僧侶の爲す所を行ふな」とは西洋の諺である。我々の進むべき道は近きに在る。之を遠きに求めてはならない。我々は他人の摸倣をなさずして、自己の道を歩むべきである。自己の道を歩むとは何であるか。建國の精神に立還り、そして之を時代化することである。顧みれば、我々國民の或者は日本の歴史・文學よりも、支那の歴史・文學をより多く教へられた。我々國民の或者は東洋の歴史・思想よりも、より多く西洋の歴史・思想を教へられた。そして自己を知らずして他を知つて

居る。而も之を熟知せずして之を半可通に知つて居る。我々の態度は是でよいのであらうか。今や内外の事情は實に我々の反省を促し來つて居る。我が國民性を考へよ、我々の國體に透徹せる理解を持つて、そして我々の建國の精神に甦生せよ。蓋し天は往々にして、其の知らざる間に重大なる任務と無上の光榮とを、其の人に授くる事がある。我々が我が高明なる建國の精神に目覺むる時、天は我々に東西の文明を消化・渾成して、以て世界の新文化と人類の平和とを招來すべき絶大の任務を授けんとして居るのであるまいか。(建國の精神に還れ)

三三 家の意識

和辻哲郎

ヨーロッパの都市の家は、豪富の人を除いて、個人が一つの建物を占居するのではない。建物を入ると左右に一戸づつの家

和辻哲郎
明治廿二年兵庫
縣に生る。京都
帝國大學教授。
ヨーロッパ
Europe
歐羅巴。

がある。階段をのぼれば左右に一戸づつの家がある。五階ならば十戸、六階ならば十二戸が廊下^に面して存してゐる。更に入口から中庭へ抜けて他の入口に行けば、そこにも階段を持つた同じ意味の廊下^が、同じ建物の中を上へのびてゐる。この廊下は言はば道路の延長である、否本來の意味に於ける往來である。そこでこの往來を通つてどこかの家の戸口を入るとする。そこに家の中の廊下がある。室々の戸口がこの廊下に向つて開いてゐる。が、その室の戸口は鍵で密閉し得るものであり、室相互の間の通路も亦密閉し得るやうに出来てゐる。従つて僅かに一舉手によつて、各室が獨立した一つの「家」となり得る。故に他の家庭に何の煩ひも與へずに、その一室を一つの「家」として住むことが出来る。この點からは家の中の廊下も亦往來の資格あるものと見ねばならぬ。借間してゐる人の許へ書留郵便

を届けようとする配達夫が、建物の中の往來を通り、家の中の廊下を通つて、その人の室までやつてくるのは、この往來の意味をあらはに示したものである。配達夫のみならず、書店の小僧でも、運送屋の人夫でも、百貨店の小使でも皆さうする。日本の家の「玄関」に當るものが、こゝでは個人の室の中にある。さうなると往來は個人の室の前まで來てゐることになる。個人が直接に往來に、従つて町に接觸するのである。

が、また逆に考へることも出来る。個人はおのが室に、或はおのが「家」にゐるまゝの通常の姿で廊下へ出る。そこで一寸帽子を頭にのせても、一つ外の廊下へ出る。そこから階段を下つて、建物の入口から更にも一つ外の「廊下」道路へ、そのまゝの姿で出る。そのアスファルト敷の通路は毎朝、水で洗はれて、建物の中の廊下よりも汚いわけではないのである。ただそれが屋内の

アスファルト
Asphalt

廊下と異なる點は、上に空が見え、冬は暖房の設備がないことだけに過ぎぬ。人はこの廊下を通つて飲食店へ行つて食事をすゝる、或はカフェーへ行つて、一杯のコーヒーを前にして音楽をきき、カルタを弄ぶ。それは大きい家の中で、長い廊下を傳つて食堂へ行き、或は客間へ行くのと何の異なるところもない。それは單に一つの室を家とする獨身者に限つたことでなく、一つの家族としても日常に行ふところである。彼らは丁度日本の家族が茶の間に集まつて無駄話をしたり、ラヂオを聞いたりすると同じ意味で、カフェーへ行つて音楽をきき、カルタを弄ぶ。カフェーは茶の間であり、往來は廊下である。この點から云へば、町全體が一つの「家」になる。鍵を以て個人が社會からおのれを距てる一つの關門を出れば、そこには共同の食堂、共同の茶の間、共同の書齋、共同の庭がある。

ラヂオ
Radio

だから、廊下は往來であり、往來は廊下である。兩者を判然と區切る關門はどこにもない。といふことは、家の意味が一方では個人の私室にまで縮小され、他方では町全體に押しひろげられるといふことに外ならぬ。後の場合はつまり「家」の意味が消失したといふことである。家がなくなつてただ個人と社會とがあるといふことである。

日本には明かに「家」がある。廊下は全然往來となることなく、また往來は全然廊下となることがない。その關門としての玄関又は入口は、そこで截然と廊下と往來の別、内と外の別を立ててゐる。我々は玄関を入る時には「脱ぐ」ことを要し、玄関を出るときには「はく」ことを要する。配達夫も小僧もこの關門に入ることは出来ない。カフェーも飲食店もすべて「よその家」であつて、決して食堂や茶の間の意味を持たない。食堂や茶の間はあ

くまでも私的のものであつて、共同的のものでない。
日本人はこのやうな「家」に住むことを欲し、そこでのみ寛ろぎ
を得る。たとへどれほど小さくとも、このやうな「家」としての資格
を有するものを住居として求める。それほどの執着を起させ
る魅力はどこにあるのであらうか。「家」は截然と外なる町に對
しておのれを區別してゐるが、併しその内部に於ては、室の獨立
といふことは全然ないものである。室をへだてるものは、襖障
子であるが、それらは鍵をかけるといふが如き防禦的對抗的な
「へだて」の意志の表現としての性質を曾て帯びたこともないし、
またその可能性も持たない。それを明けようと欲する人に對
しては、それを拒み得る何の力も與へられて居らぬ。しかもそ
れが或意味の「へだて」として役立つのは、それが閉されてゐると
いふことによつて表示されてゐる「へだて」の意味が、他の人によ

つて常に尊重されるといふ、相互の信頼にもとづくものである。
即ち「家」の中にあつては、人々はおのれを護つて他に對するとい
ふ必要を感じない。それは言ひかへれば、おのれと他との間に
「へだて」がないことである。鍵は他の意志に對して「へだて」の意
志を表示するが、襖障子はむしろ「へだてなき」意志を表示しつゝ、
その「へだてなき」の上に於てただ室を仕切るに外ならぬ。言は
ば、それは一つの西洋間の中に置かれた衝立の意味しか持たな
い。鍵を以て護るといふやうな意味の個人は、「家」の中では消滅
する。かかる「へだてなき」を内につゝみつゝ、外の世界に對して
は鍵のあらゆる變形(その内には高い板塀や、恐ろしげな逆茂木
などもある)を以て對抗するのが日本の「家」である。それでもし
そこに魅力があるとすれば、それはこの小さな世界の内部に於
ける「へだてなき」に外ならぬであらう。

逆茂木
刺のある木の枝
を柵に結んで敵
をふせぐもの。

桃山時代

が、人は問ふかも知れない、このやうな小さい世界は西洋風の長屋に於ても保存し得るではないかと。しかしこの西洋風の長屋は、それを作る時に共同的な協力を必要とするのみならず、その存立が居住者の共同的な態度を豫想するものである。たとひ廊下を距てた隣と、互に交際をしないやうな状態に於ても、それはなほ一つの組織であつて、暖房の設備、湯の設備、昇降機の使用等に於て常に共同であることを免れない。さうしてこの共同的であることが日本人をして最も不安ならしめるものなのである。それは總じて日本に於ける最も強い「へだて」が、家と外なる世界との間に存することによつて顯はにされてゐる。ヨーロッパに於ては、最も強い「へだて」は、過去にあつては町を取巻く城壁であり、現在にあつては國境であるが、日本にはそのいづれもが存しない。桃山時代の前後に始めて諸地方の城下町

豊臣秀吉が文祿三年山城の桃山に大城を築いてから此の名がある。

は濠と土手を以て取圍まれたが、しかしそれは武士の一群の攻撃を豫想して作つた防禦工事であつて、この町が他に對して、おのれを護りへだてる意味を表したものではない。ヨーロッパの町の城壁に當るものは、日本に於てはまさしく家のまはりの垣根であり、塀であり、戸閉りである。従つてヨーロッパ人が城壁の内部の世界に於て永い間訓練されたと同じことを、日本人は垣根の内部のもつと小さい世界に於て訓練されたのである。城壁の内部に於ては、人々は共同の敵に對して團結し、共同の力を以ておのれが生命を護つた。共同を危くすることは隣人のみならずおのが生存をも危くすることであつた。そこで共同が生活の基調として、そのあらゆる生活の仕方を規定した。義務の意識はあらゆる道徳的意識の最も前面に立つものとなつた。それと共に、個人を埋没しようとするこの共同が、強く個人

性を覺醒し、個人の權利はその義務の半面として同じく意識の前面に立つに至つた。だから「城壁」と「鍵」とは、この生活様式の象徴である。

然るに垣根の内部の小さい世界に於ては、その共同は生命を危くするといふ如き、敵に對するものでなかつたと共に、また容易に献身的な態度を引出し得る如き、自然的な情愛にもとづいたものであつた。夫婦親子兄弟、是等の間では義務の意識よりも愛情が先立つ。個人は喜んでおのれを没却しつゝ、そこに生活の満足を感じ得る。共同が「個人」を待つて始めてその意義を發揮し得るとすれば、個人が喜んでおのれを没却し得るこの小さい世界に於ては、共同そのものが發達し得なかつたのは當然であらう。そこで人々はおのが權利を主張しなかつたと共に、また公共生活に於ける義務の意識にも達しなかつた。さうし

て、この小さな世界にふさはしい「思ひやり」「控へ目」「いたはり」といふ如き纖細な心情を發達させた。これらはただ小さい世界に於てのみ通用し、相互に愛情なき外の世界に對しては力の乏しいものであつたが故に、その半面には、家を一步出づると共に仇敵に取圍まれてゐると覺悟するやうな、非社交的な心情をも伴つた。だから「家」のまはりの垣根が丁度城壁と鍵に當るのである。かく見れば、「家」の内部に於ける「へだてなさ」への要求が強ければ強いほど、共同への嫌惡も亦強いといふ所以が明かになるであらう。 (日本の珍らしさ)

三三 月の都

みとせばかりありて、春の初より、かぐや姫、月の面白う出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、月のかほみ

るは思むことと制しけれども、ともすれば人まには月をみて、い
 みじく泣き給ふ。七月の望の月に出で居て、せちに物思へるけ
 しきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、かぐや
 姫例も月をあはれがり給ひけれども、此の頃となりてはただごとにも侍らざ
 めり。いみじくおぼし歎く事あるべし。よくく見奉らせ給へ。」と言ふを聞
 きて、かぐや姫にいふやう、
 「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ。
 うましき世に。」と言ふ。かぐや姫、月を見れば世の中心細くあは
 れに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき。」といふ。かぐや姫のあ

(本字活古版木) 語物取竹



(筆夫忠村吉) 夜月の望

る所に至りてみれば、猶物おもへるけしきなり。是を見て、あが
 佛、何事を思ひたまふぞ。おぼすらんこと何事ぞ。といへば、思ふ事
 もなし。物なん心細くおぼゆる。といへば、翁、月な見給ひそ。是を
 見給へば物おぼすけしきはあはれぞ。といへば、いかでか月を見ずて
 はあらんとて、猶月出づれば出で居つゝなげきおもへり。夕闇に
 は物おもはぬけしきなり。月の程になりぬれば、猶時々は打ちな
 げき泣きなどす。是をつかふものども、猶物おぼす事あるべし。」と

さゝやけど、親をはじめて何事ともしらず。

八月望ばかりの月に出て居て、かぐや姫といたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。是を見て親どもも、何事ぞと問ひさわぐ。かぐや姫泣くくゝいふ、さきさきもまうさんと思ひしかども、かならず心惑はし給はん物ぞと思ひて、今まですぐし侍りつるなり。さのみやはとてうち出て侍りぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず。月の都の人なり。それを昔の契ありけるによりてなん、この世界にはまうできたりける。今は歸るべきになりければ、この月のもちに彼のものとの國よりむかへに人々まうでこんず。さらばまかりぬべければ、おぼし歎かんが悲しき事を、この春より思ひなげき侍るなり」といひていみじく泣く。翁「こはなでふ事をのたまふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさはせしを我がたけた

竹取物語

伊勢物語と共に平安時代の物語の先驅。作者については諸説あつて一定してゐない。全篇傳奇的傾向を帯びてゐる。

ちならぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へきこえん。まさ

新制大日本讀本 卷九終

昭和六年六月十三日初版印刷
昭和六年六月十六日初版發行
昭和六年十一月二日訂正再版印刷
昭和六年十一月七日訂正再版發行

不許複製製



新制大日本讀本

奧附

自卷一	自卷四	定價
至卷十五	至卷一	金六拾參錢
		金五拾八錢

著者 藤村 作

東京市京橋區銀座一丁目五番地

發行者兼 大日本圖書株式會社

代表者 杉山常次郎
專務取締役

東京市京橋區銀座一丁目五番地

發行所 大日本圖書株式會社

振替口座東京二一九番

大日本圖書株式會社

大日本圖書株式會社



小田 傳 章

あまのこころを
よめるは
あまのこころを
よめるは
あまのこころを
よめるは
あまのこころを
よめるは

亭子夜合

